

第二十二章 魔王の宴

1

足首の冷たい感触が、ハジメの目を開かせた。

何度かまばたきを繰り返し、焦点が合ってきた時、彼は自分の足が水に浸かっていることを知った。

「洪水か!」

呆然とするハジメは、その時になつて自分の両腕が万歳をする格好で、鎖で壁に繋がれていることに気づいた。さらに周囲を極太の鉄格子が囲っている。

鉄棒の隙間から見える部屋の中には人の姿はない。

——あの時。リアルキラーズに隠れ家を発見された時、ハジメは久保田たちを逃がそうと敵の前に立ちはだかった。ところが威勢が良かったのはそこまでで、迷彩服の新兵器、黒い光線によって自由を奪われ、抵抗しないまま、こうして捕まってしまった。

しかも手ひどい虐待を受けた。

やってきたのは利根崎という金髪軟弱男。彼はハジメの顔といわず腹といわず、銃の台尻で何度も執拗しつように殴りつけた。リアルリアルの居所を白状させるんだと表向きはもつ

ともらしい理由を仲間にかけていたが、実のところ、大
学で恥をかかされた恨みを晴らしたただけなのだ。

プラズマ放射装置を浴びせられっぱなしのハジメは、
金髪頭に反撃することもリアルパワーで防御することも
できなかった。

そのプラズマの放射が、今はストップしていた。水浸
しのせいで電源がショートしたのだ。装置は黒い筒先を
向けたまま、無用の長物と化していた。

身体じゅうの痛みが急速に消えていく。リアルパワー
が復活したことの証^{あか}しだ。

ハジメは腕に力を込めて鎖を引っ張った。最初のひと
引きでコンクリート壁にヒビが入り、白い破片が水の中
にばらばらと落ちた。再度、肺一杯に息を吸い込み、気
合い一閃、背後の壁を蹴ると、鎖は根こそぎ壁からもぎ
取れた。

鉄格子のあいだからしみ込んでくる水は膝の高さまで
に達していたが、それ以上に増える気配はない。部屋に
は窓がないので、外の様子はうかがえず、ここがどの
何階なのかも皆目つかめない。

（それにしても、この水は何だ？ ……とにかく逃げる
が先だ）

ハジメは腕に詰められた鉄の輪を引きちぎり、すつか
り充電したリアルパワーで鉄格子を歪め、部屋の中央へ

歩み出た。冷たい水が足にからみつく。

「……誰か……救援を乞う……」

思いがけず、テーブルに放置されていたレシーバーから、切迫した男の声が流れてきた。ハジメは迷ったが、レシーバーを取り上げ、耳に押し当てた。何か判るかも知れない。

「——どうした？」

相手はすると早口でまくしたてた。

「……こちら地下四階、南階段。突然階上から湖水が押し寄せ、仲間の半数が流された。W I B Aは沈み始めたのか？」

「落ち着け。リアルたちはどうした？」

「リアルう？」レシーバーの向こうで声が首を傾げた。

「捕虜のなった小田切ハジメとかいう小僧を除いた他の連中は、同様に地下に向かったらしい。そんなことより——」

「ありがとよ」

ハジメはレシーバーを水面に放り投げた。その目がプラズマ装置に寄りかかるように置かれた小ぶりの銃を捉えた。彼は行きがけの駄賃とばかりに、見かけより軽いその銃を尻ポケットに挿じ込んだ。

「いざという時、目に見える武器のほう脅しが利く」扉の外は左方向にだけ廊下が延びていた。どん詰まり

の部屋だったのだ。正面の壁にデカデカと裏文字で『B
1F』と書かれていて、下に小さくW I B Aと併記され
ている。

「俺はW I B Aの中にいたのか」ハジメはしげしげと首
を巡らせたが、グレイがかつた壁と水の廊下を取り囲ん
でいるだけだ。「とにかく行き先は地下だ」

ハジメは水の上を歩き出した。こうしているうちにも
水位はどんどん下がっていく。

レシーバーの男は、上の階から水が押し寄せたような
ことを言っていた。やはりW I B Aが沈みかけたか、あ
るいは傾くぐらいのことは起こったのだろう。

「だいたい水の上に街を浮かべようなんぞ、初めっから
無理な話なんだ」

むんは顔に落ちる水を払いのけると、手早く長い髪を
後ろに梳^すき上げた。髪も身体もぐっしよりと濡れそぼっ
ている。

身体の震えがまだ治まらない

あれほど大量の水が、しかも階段の上から襲いかかっ
てくるなどと、誰が予測し得ただろうか。下の階にばか
り注意を払っていた迷彩服や中村の仲間たちは総崩れと
なり、まるで車のウィンドウに落ちた枯葉のように、声
を出す間もなくほとんど一瞬のうちに押し流されていっ

た。

むんと炎少年は運良く非常扉のへこんだ所にひっかかり、滝のような洪水に対して、精一杯踏ん張って抵抗した。

洪水は数分もすると勢いを弱め、やがてするのは雨だれのように滴り落ちるしずくの音だけになった。

ガガガ。炎少年のスピーカーが聞き慣れないノイズを発した。

『……マズった。……大事なパーツが……濡れちまったぜ……ガガ』

車椅子のモーターが水を被って回らなくなったらしい。一時は水位が少年の胸元まで達したのだから無理もない。

「ダメ？」

『無理だな。これじゃガラクタ同然だ』

実際は誰かが後ろから押せば、通常の車椅子のように少年を運ぶことができる。しかし自走できないことは彼のプライドが許さないのだろう。それ以前に、階段を降りていくことができない。ここまで来れたのはハイテク車椅子の底部にあるキャタピラのおかげだ。

それが使えないとなると状況は厳しい。

母親の最期を看取った少年は、身体を動かす兆候を見せた。しかし麻痺を脱出するほどの奇跡が訪れたわけではなく、少年は元のものと言わぬ人形に戻ってしまった。

いや言葉は脳に接続した車椅子搭載のコンピュータから溢れるほど出てくるのだが。

「降りて」

むんは少年を座席に固定しているベルトを外しにかかった。

『どうすんだよ？』

「わたしがおぶっていく」

『みつともねえ！ 俺は赤ん坊じゃねえぞ』

「転送装置に乗りたかったら我慢しなさい」

言い聞かせるような口調に、少年は口をつぐんだ。

しかし、子供とはいえ全身麻痺の人間を背負うのは骨が折れた。小さな頃から亡き弟を背中に乗せる機会が多かったむんは、どうにか少年の身体をおぶると、車椅子から引き抜いたベルトでふたりの身体を固定した。

脳とコンピュータをつなぐケーブルに手をかけたところで、少年が待ってくれと叫んだ。

「なあに？ 外すと命に関わるとか？」

『命に別状はねえ。ただ接続が切れると、俺の目と耳と口がなくなる。暗闇はご免だ。ヘッドレストの裏に差し込んである携帯電話を代わりにつないでくれ』

予備のインタフェースユニットらしい。言われるとおりにすると、少年の声が携帯に移った。

『コイツを頭に巻いた脳波増幅ユニットに挟んでくれ。』

……よし、これで完璧だ。いつでもいいぜ』

開き直った炎少年はむんの耳許で号令をかけた。むんはバランスをとりながら、一歩ずつ階段に近づいていった。心の中で親友の名を呼びながら。

(萌黄、もうちよつと待っててな)

誰かの声を聞いた気がして、萌黄は正気を取り戻した。萌黄は球状の黒い構造物、真佐吉が言うところのヘリアルボールの上にしがみついていた。よく落ちなかったものだ。

「勘弁してくれーっ」

悲鳴がまた聞こえた。萌黄はぼんやりする頭をひと振りして顔を上げた。

エンジェルフォールは放流を止めていた。空中にたれ込める霧はレースのカーテンのように視界を覆い尽くしている。

「ひーっ」

その声には聞き覚えがあった。ネット配信された漫才映像で萌黄を何度も笑い転がし、床の上でのたうち回らせた伝説の男。

「雛田さん！」

わあーっという絶叫とともに、ひとりの男が背広の上着をはためかせながら落下してきた。

雛田が手足をバタつかせながら落ちてくる。

彼の発する意味不明な言葉が、萌黄の脳を揺さぶり、彼女の意識をはつきりと覚醒させた。同時に頭の中いっぱいにはエアクッションをイメージすると、雛田の落下地点——萌黄のいる構造物とはかなり離れていた——に置いた。

雛田の身体が、何もない空中でバネのようにバウンドした。

「うひゃああっ」

声を裏返しながら上下する伝説の芸人。テレビ番組の中なら爆笑を買うこと必死な光景だが、萌黄は全神経を集中させて、受け止めた雛田の身体をゆっくりと引き寄せた。

生きた心地がしなかったのだろう。雛田は白目を剥いてグツタリしていた。

細かく入り組んだ黒い骨組みの上に、どうにか雛田の重い身体を乗せ、萌黄はフウと全身で息をついた。

構造物を通して、眼下にぽっかりと開いた深い穴が見える。落ちればひとたまりもない。今は放水も止まっているため羽根車は回っていないが、何人が鋭い羽根の刃

にかかったらどうか……。

萌黄はぎくりとした。ここに雛田がいる。真佐吉に見せられた映像には、むんや仲間たちが映っていた。

「ねえねえ」

萌黄は真っ白な顔を黒い骨組みに押しつけている雛田の肩を揺さぶった。しかし瞼の裏から現れた黒目が、萌黄の顔に焦点を合わすまでには少し時間がかかった。

「ああ、萌黄さんか……僕、もしかしたら、まだ生きてる？」

「間違いなく」

「そうかい」

雛田はまた目を閉じた。

「むんたちといっしょやったんでしょ？」

「ああ、迷彩服に同行させてもらってね。でも、いきなりだよ、鉄砲水が階段の上からザーツて」

彼は銃を構えながら前進するリアルキラーズの後ろから、中村らと及び腰でついていった。むんは炎少年の車椅子とともに最後列にいたという。洪水は彼らを飲み込み、階段の上を転がしながら下へ下へと押し流した。彼は最後の最後で滝に流れ着き、落とされるまいと何かにしがみついていたという。それでも力尽き、手を離れた。「むんさんたちは無事だと思うが……で、なんで僕はこんなヘンなのに乗ってるの？」

萌黄は天井を指さして言った。

「あそこから落ちてきたんですよ」

仰ぎ見た雛田はウヒヤツと叫んで身体を強張らせた。

目分量でおよそ五、六階の距離。

「で、で、こ、ここは、どこなんだ」

「真佐吉さんのホームグラウンドらしいですよ」

雛田は驚きっぱなしで剥き出した目をあちこちに這わせる。

「この黒いのは——いやそれよりあの丸っこいケースは何だ？　ちよちよちよつと！」

雛田は構造物の上を匍匐^{ほふく}前進した。その先にある透明ケースを目指して。

「なあ！　こ、これ、清香ちゃんか？　なんでこんなところに入れられてんだ!？」

萌黄は、清香も自分といっしょにここへ渡ってきたが、途中で離ればなれになり、彼女は齋藤とともに真佐吉に捕えられたと話した。

話しているあいだも、雛田は清香のケースに顔を押しつけている。怖いほどの目付きだ。

「コイツは開かないのかい？」

「わたしの力では……。今の今までリアルパワーも充電中でしたし」

萌黄はそろそろと骨組みの上を雛田のそばまで移動し

た。そしてケースの端をつかみ、クツと力を込めた。

「鍵がかかってますね」

「割ってくれればいいんだ！——いや、済まない。命の恩人に対して許されん物言いをしてしまった」

雛田は一瞬で沸騰した感情を、あわてて抑え込んだ。

「いいえ、そんな……やってみます」

パワーはかなり回復しているできるかも知れない。萌黄はそばに寄ると、強化樹脂でできたと思われるケースに両手をあてた。

〈待ちたまえ〉

真佐吉の声だった。それが場内に大砲のように轟いた。萌黄は目を開いたが、構わず両手に力を込めようとした。

〈そのリアルボールは傷つけないほうがいいぞ。なぜならそいつは、君の元の世界、リアルワールドへの転送装置でもあるんだからな〉

萌黄の手がケースから離れた。

これが？ この妙な形をした物体が？

〈私はウソはつかない。親の私がそれでは、ゲームにならないからね〉

この期に至って、まだバカなことを言っている。萌黄は寄せた眉根をやや晴れてきた霧のカーテンに向け、「ゲームやなんて、どの口が言うてんのよ！ そもそも

爆破装置と転送装置が同じやなんて、フエアやないわ」
へそう言われると、返す言葉はないな

真佐吉に悪びれた様子は小指の先ほどもない。

「おい、伊里江真佐吉——さんとやら。僕は雛田、雛田義文という者だ」

雛田はバランスの悪い球体の上に立ち上がった。そして、ケースに置いた片手を支えに、もう一方の手で拳を作ると、声に対して話しかけた。

萌黄はハラハラしながら見守るしかなかった。

「僕はこの子の」ケースの中を指し示す。「影松清香の父親の相方だ。父親はつい先日死んだ。僕の運転する車で娘に会いに行く途中、長野防衛隊とか抜かすガキどもに殺されたんだ。無念の死だった……。僕は彼から託されたんだ。娘を頼むと。だから僕はこの子の父親代わりでもあるんだ。」

アンタの身の上は、少しっばかり聞かせてもらった。どえらい発明をしたために兄弟ともども大変な苦勞をしたんだってな。弟を連れて逃亡生活の日々を送ったんだってな。判るよ、自分の苦勞より肉親の苦勞のほうが心にズンと来るもんだ。

だからよ。僕の気持ちを察してもらおうわけにはいかなかな？ 僕はただこの子に幸せになっただけほしいんだ。僕の命なんざどうなってもいい。何なら僕が身代わりに

なつてもいい。その代わりに、この子を自由にしてやってはくれないか？」

萌黄は聞きながら、胸が熱くなるのを感じた。伝説のお笑いコンビ、カゲヒナタのボケ役雛田は、こんなにも相方の娘のことを心配しているのだ。自分の命を差し出そうとまでするなんて。——もちろんヴァーチャルではリアル代理にはなれないのだけれど。

雛田の横顔に涙がこぼれた。萌黄は少し腑に落ちないものを感じた。相方の意志を継いだとはいえ、清香は他人の子だ。なのに雛田からは尋常でない熱意が伝わってくる。それほど彼と清香のあいだには密接な交流があったのだろうか？

へほう。あなたは往年の人気コメディアンだったかたですな。ふむ——少し検索させてもらいましたよ。——カゲヒナタですか。浅学にして私は存じ上げておりませんでしたかね

言葉はへりくだっているが、居丈高な口調はそのままだ。

へ某大物タレントが司会をつとめる番組に出演した際、四つん這いになり、犬の真似をして見せろと言われ、これを拒否。逆にお前がやってみるとその大物タレントのネクタイを引っ張ってスタジオをぐるぐる回った——ハハハハ。それで業界を追放されたのですか。これは痛

快な、ハハハハハ

萌黄のはらわたが煮えくり返った。関西弁でいう、いてももうたるかの気分だ。

インターネットが普及して以来、人の過去は消すことができなくなった。テレビを見ていても、リモコンでカーソルをタレントに重ねるだけで、生い立ちから賞罰、小さなスキヤンダルから『街で見かけました写真』まで検索できる始末。他人のアラ探しなど、本腰入れてかかれば、プロの探偵でなくてもできてしまう時代だ。

（だからこそ、知ってても口にせえへんのが、大人の分別っちゅーもんでしようが。それをこの真佐吉という人は――）

雛田は頭を垂れて、軽卒な真佐吉の言葉をじつと耐えている。

萌黄は思い出した。彼はあの事件以来、業界を干され、このような目には何度も遭遇してきたのだ。なぜ知っているかといえば、萌黄も検索しまくったことがあるからだ。だから、ブレイクする前後、雛田にはゴールイン確定と目されていた女性がいたことも知っている。その後、破局し、女性は相方の影松と結婚したことも。

そうして生まれたのが、清香だ。

（雛田さんは、かつての恋人への面影を清香さんに見てはるんやろう……）

萌黄は自分の置かれた状況を忘れて、ファンの立場でしばし、ごひいき芸人の思いに心を馳せた。

しかし広い場内にサウンド放送のごとく響き渡る冷たい声が、萌黄の心を一瞬のうちに現実へと引き戻した。へふむ。これはつまり、雛田さん。清香というお嬢さんはあなたの実の娘なんですね。〳

3

「流されなかったのか」

シユウはちらつと視線をよこすと、すぐまたせわしなく動く手許に戻した。その髪の毛や服から水がしとしとと垂れている。

「シユウさんこそ——何してるんですか？」

足を止めると、途端に背中の中の重みが膨らむ。むんは手すりによりかかって息を継いだが、耐えきれずにそのままずると階段にへたり込んだ。

意識のない人体が重いことは知識として知っていた。

幼い頃から弟の面倒をみてきたむんは、人を背負うには自信があったが、ここ数日の疲労もあって、さすがに限界を感じていた。濡れたまま身体にへばりついた服や靴のせいもある。

「これか？ フロアを解放するために各階を管理するP

AIにリセットをかけている」

シュウはPDA（携帯情報端末）のキーを注意深く叩いている。PDAから延びたケーブルは、壁のスリットに差し込まれたICカードに繋がっていた。

「真佐吉に洗脳されたPAIですね」

リセットすることで真佐吉から受けた指令を全て削除し、合わせて初期設定された以外のふるまいはしないよう、ソフト的に足枷^{かせ}をはめるのだ。

「そうなんだが」シュウは唇を曲げた。「やられたよ。

洪水が起きたのは、WIBAの水面下にあるベントに注水されたせいだ。建設の途中、ここは広さや重さが度々^{たびたび}変わったので、そういう部分が必要だったらしい」

「上の階はリセット済みだったんじゃない」

「だから、やられたんだ。ここの管理は複雑に入り組んでいるようだ。アノ社長がもう少し友好的なら、こういうこともあらかじめ想定できたのにな」

アノ社長がどの社長なのか、むんには判らない。

「この作業も無駄かも知れないが」

よしと叫んでカードを壁から抜き取る。シュウはむんに向き直ると、ようやく彼女の背中の炎少年に気づいた。目を丸くするシュウを尻目に、むんはよっこらせと両膝に力を入れて立ち上がった。

階下から足音が駆け上がってくる。シュウの部下だ。

「副長！」部下は敬礼すると、もつれる舌で報告した。

「三つ降りれば、ここは行き止まりです。ですが水が流れ込んだ穴の先には、空洞のようなものがあります。そこに何かがあるのか、霧のため視界が悪く、はつきりとは見えません。引き続き、仲間が調査中です」

「他に流されなかった人はいるの？」むんは訊ねずにはいられなかった。「あなたがた以外の民間人が」

答えてやれと、シュウが目顔で促した。

「一階下のフロアに、伊里江という男が倒れています。

他にも数名」

「雛田さんは？」

「見当たりません」

「よしっ」シュウは表情を引き締めると、PDAとICカードを部下に差し出した。「残りの階は貴様にまかせる。できるな？」

「はっ」部下は緊張とともにそれらを受け取った。

シュウは階段を駆け下りたが、すぐに足を止め、重い荷物を背負ったむんを振り返った。

「気にしないでください。すぐに追いつきます」

むんは先手を打って、強い口調で言った。

「そうか」

シュウは軽く手を挙げると、水たまりを跳ね飛ばしながら、階下へと姿を消した。

「さてと……行くよ、炎クン」

肩越しに呼びかけると、少年の携帯が声を発した。

《捨てていくわけには、いかないもんな。あさつてには北海道級の爆発を起こす俺をよ》

減らず口は相変わらずだ。むんも負けてはいない。

「転送装置を見つけたら、素っ裸にひんむいた上に、オチンチンに旗立てて放り込んだるワ」

雛田は左手で額を拭った。いつの間にか冷たい汗が全身を伝い落ちていた。滝の水で湿度が上がったことばかりが理由ではない。

「どうして——」雛田の右手の指先は透明ケースに触れたままだ。「どうして、それを」

へハハハハハ真佐吉は癩さわに障る笑いかたをした。へなげ君とその清香さんが親子であることを知り得たかと問うのかね？ 簡単な推論だ。彼女が生まれた日、病院には彼女の母親が分娩室に入った記録がない。立ち会った医師や助産師もいない。しかも母親は直前まで、君と付き合っていたという情報もある

「それだけじゃ清香の出生を疑う根拠にはならん！」

雛田は声を裏返して叫んだが、真佐吉はそれ以上は笑って取り合わなかった。

雛田は背広の内ポケットから携帯電話を取り出した。

「なあ、カバ松よお。なんでアイツは知ってんだ？」
しかし画面に映ったカバ松はフリーズしたままで、単なる待ち受けの静止画と化していた。

「オイ、カバ！ この大事な時にフザけるなよ、オイつたらオイ！」

携帯を腕で叩いてみたりする。それでも凍りついたカバ松に動く気配はない。チクショー、やっぱりPAIなんか相手にするんじゃないかと、雛田は清香の眠るケースに額を押しあてながらわめいた。

（PAIがフリーズ？ こんなタイミングでそんなことが起こるかな？）

疑念が萌黄の胸に去来した。それも真佐吉の仕業ではないのか？

——にしても。

萌黄は少なからぬ衝撃を受けていた。あの清香さんと雛田さんが親子だったとは。萌黄の中では清香のキュートナルックスと、芸人雛田の丸っこい体格がどうしても重なり合わなかった。

真佐吉の声がした。今度は含み笑いだ。

へこうして見ると、君の後ろにいる萌黄さんのほうが娘としてはお似合いだな。フフフ

萌黄はむっとした。が、雛田が振り向いたのであわてて顔を逸らした。しかしその態度こそ相手を傷つけるも

のだと気づいて、自己嫌悪に陥った。

真佐吉はふたりの反応がよほど気に召したのか、ひとしきり笑うと、

へつくづく、君たちを観察していると時間を忘れるよ。しかも、ふたりとも屈折しているようできて、その実、素直なところまで瓜ふたつだな

大きなお世話だ。萌黄は舌打ちした。真崎とはタイプは違うが、真佐吉も他人を翻弄することに喜びを見出す人間なのだ。そんな性格が災いして、かえって自分で自分をピンチに追い込み、向こうの世界で命を狙われる羽目になったんやないんか！

愉快ついでに、私からも面白いことを教えてあげよう。まあ、雛田さんの芸ほどではないかもしれないが

いちいち言うことが皮肉ったらしい。

〈影松さんを殺したという『長野防衛隊』だが、その種を蒔いたのは私だ。細菌テロの怖れがあると、彼らにデマを流したのは私なのだ〉

4

雛田の驚いた様子が、背中からでもよく判った。

〈最初は、W I B Aで私の手足となって働いてくれる人間を集める予行演習のつもりだった。言葉だけでどこま

で人を動かすことができるのか、試してみたかったのだよ。それでターゲットを長野県民に絞り、メールや電話で煽ってみた。もちろん長野を選んだのには格別の理由はない。そうしたらどうだ、予想以上に彼らは驚きあわて、頼みもしないのに勝手に『長野防衛隊』などという組織を作り始めたではないか。さらに勢い余って、道路にバリケードを設けたり、不審者の摘発まで始めた。いやはや庶民の疑心暗鬼という化け物は一種の可燃物だね。火の粉がひとつ落ちただけで、燎原りょうげんの火のごとく広がっていく。<

今や、真佐吉は喜々としてしゃべくりまくっている。

萌黄は頭痛を感じた。この男には罪悪感というものが無い。長野防衛隊がその後、どれだけの騒動を引き起こし、多数の死者や負傷者を出したのか、知らないはずはないだろうに。

へもうひとつ、聞かせてあげよう。<

萌黄や雛田の呆然とした顔に味を占めたに違いない。

真佐吉の口調はますます熱を帯びてきた。

へハモリ氏の件だ。萌黄さんは確かファンだったし、雛田さんにとっては業界のトップだ。興味あるだろうか？

ハモリ氏はテレビの生放送中に自分がリアルであることを、そうとは知らずにカミングアウトした。そのためにハモリ氏はリアルキラーズの急襲を受け、楽屋の中で

自殺と見せかけて殺されてしまった。これをご覧▽

スクリーンに再び灯が入り、なんとハモリを正面から捉えた映像が現れた。部屋の照明は暗く、サングラスの彼の顔色は全く読めない。

(これは、まさか……)

萌黄の心を読んだように真佐吉が言い添える。

へそう、これこそハモリ氏の生前最後の姿だ。どうかね、これほどのお宝映像があるかな?▽

萌黄の全身が粟立った。すると場所はアルタの楽屋ではないか。見たくない、怖い。でも目が離せない。

ハモリは聴き取りにくい声で何ごとかつぶやいている。時々うつむいてはまた顔を上げる。どうやら映像は携帯のカメラによるものらしい。とすると話し相手はPAIだろうか。

《俺、もう自信がないよ……》

これほど打ちしおれたハモリは見たことがない。萌黄は締めつけられる思いがした。

その時、ドアをノックする音がした。ハモリは顔を上げもしない。がさごそと誰かの入ってくる音がする。そして何ものとも知れない声。

《ハモリさんだよな。俺たちはアンタを連れ出しにきた。アンタの身に危険が迫ってる》

へこれは私がハモリ氏の身柄確保のために送り込んだ男

たちだ。リアルキラーズが来ることは予想されていたのでね。ところがコイツら、どうしようもない役立たずで、いやはや——>

真佐吉は吐き捨てるように言った。

ハモリはファンが文句をつけにきたと思ったのか、しきりに頭を下げ、申し訳ありませんと謝るばかりだ。

そして事態は唐突に展開した。かすかな物音がして、ハモリが顔を向けた瞬間、迷彩服が彼の上に覆い被さった。リアルキラーズの襲撃だ。携帯はハモリの手を離れて畳の上に落ちた。パンツという乾いた銃声も聞こえた。無言の格闘劇はすぐに終わった。迷彩服のひとりが天井の電灯にロープをかけて輪を作り、もうひとりがそこへ気絶したハモリの首を通そうとしている。

萌黄は両手に顔を埋めた。指のあいだから涙がこぼれた。

へ送り込んだ役立たずの片割れが銃で撃たれた。警察に捕まって、あらぬことをしゃべられては面倒なので、別の男を送って始末させたよ。しかし、もう少しでハモリ氏を助けることができたのに——責任を痛感している<映像はハモリが天井からぶらさがっているところで終了した。

「真佐吉、この野郎、痛感するところが全然違うだろうが！」雛田は喉も裂けよとばかりに叫んだ。「いつまで

も高いところで、くっちゃべってるんじゃないやねえ。降りてきて姿を見せろ！ サシで勝負だ」

萌黄も賛成だった。このままでは元凶である真佐吉を退治できない。目の前に来ないことには、リアルパワーを浴びせることもできない。

(逆に、彼はそれを警戒してるんや……)

案の定、真佐吉は雛田を無視して、

〈会話は終了。そろそろ仕上げにかからせてもらおう〉

グイーン。四方から機械音がした。

仕舞い込まれていたアリーナ床の断片がせり出してきた。穴が閉じるつもりだ。萌黄は水のしたたり落ちる髪を手でかき上げ、穴が閉じられるのを、じっと見おろしていた。

滝はもうお終いか？ あの程度の水量で爆破装置（兼転送装置）を動かすだけの電力は蓄えられたのか？ そんなこと、萌黄などに毛頭判るわけがない。さらにはリアルだ。真佐吉のシナリオでは、自分や生き残っているリアルを、この正二十面体からなる構造物の透明ケースに閉じ込めないとならないのだ。そのために滝を止め、床を元どおりにしたことは想像に難くない。

機械音が止まった。すると今度は空調らしき音がうなり出し、霧が徐々に晴れていく。

萌黄は、自分のリアルパワーが一刻も早く充電完了す

ることを祈らずにはいられなかった。

(もう何があっても、驚いたりせえへん)

アリーナを囲む壁の下方が横にスライドした。球場ならばダッグアウトのある辺りである。開いた扉からわらわらと男たちが飛び出してきた。円形劇場にいた連中だ。萌黄は骨組みから腕を離れた。ずっとしがみついていたのでしびれが来ていた。男たちが何らかのアクションを起こすなら、即座に対応する必要がある。場合によっては、またパワー全開で彼らを吹き飛ばさなければ。

「こいつら何だア、どこから湧いてきた？」

数百人の男たちが、ふたりの周囲、つまり構造物のまわりを取り囲むように集まってくる。彼らを初めて見た雛田は、いきなりの展開に顔面を蒼白にしてパニックっている。

「雛田さん」萌黄は雛田ににじり寄り、その腕を取った。「彼らは真佐吉によつて集められた人たちです。このWIBAを思いどおりに動かすために強制労働させられているんです」

すると雛田は、何だとオと歯茎を見せて激怒した。

「結局は、汚れ仕事を他人にまかせて、自分はいつも高みの見物かい！ 結構なご身分だな」

男たちはどの顔も浮かさない表情のまま、ひと言もしゃべらない。真佐吉は彼らに何をさせるつもりか？

萌黄は男たちの先頭に、七三分けの顔を見つけた。萩矢である。

出し抜けに真佐吉の声が降ってきた。

「萌黄さん、人聞きの悪いことは言わないでくれたまえ。念を押すが彼らは皆、自分の意思で私に協力してくれているのだよ。そうだな、萩矢君？」

萩矢は立ち止まり、天井を仰ぐように顔を上げると、両手を背広の前に揃えて、「はい」と頷いた。萌黄には彼の頬がわずかに痙攣けいれんして見えた。

「では、W I B Aにいる他のリアルにも、そろそろご参集いただくでしょう。スクリーンに注目してくれたまえ。萌黄さん、君の親友も映っているよ」

エツと叫んで見上げた萌黄の目が、長い髪を後ろで留めた女性の姿が映った。

「むんっ！」

5

スクリーンに映ったむんは、どうしたわけか、背中に炎少年をおぶっていた。そうやって長い階段を降りてきたのか、数段降りては休み、また数段進んでは少年を背負い直し、を繰り返している。自分がカメラに撮られていることには全然気づいていない。

〈舞風むんさんか……。彼女は親切的な女性だな。リアルの子供をここまで連れて来ようとしてくれているのだから〉

真佐吉はまるで他人事のようにさわやかな声で言う。萌黄は反感を覚えながらも、画面から目が離せない。

むんが炎少年を連れてこようとしているのは、あくまで元の世界に送り返すためだ。真佐吉の企みを阻止するためだ。

しかし。

真佐吉の言葉がよみがえる。

——爆破装置と転送装置は同一。

萌黄は足許の巨大な黒い構造物を指で撫でる。

それが本当なら、どうすればいいのか？

（むんが来てくれたら、いい考えが浮かぶ。そんな気がする）

だが問題はこの男たちだ。彼らは真佐吉の命じるままに動く。現に今も互いに会話を交わすこともなく、耳にはめられた通信機に手を当てて、命令を聞き漏らすまいと神経を集中している。

彼らがむんから炎少年を引き剥がすのは容易だろう。

その上、むんがまた人質に取られたりしたら……。

〈よし、今だ〉

真佐吉が合図する声を出した。何が今？

萌黄の心に不安がよぎった時だった。スクリーンのむんが悲鳴を上げたかと思うと、一瞬のうちに消えて見えなくなった。

「む——っ！」

萌黄は息が詰まって叫ぶこともできなかつた。すると真佐吉が間髪入れずに言った。

〈安心したまえ、コースターに乗せただけだ〉

その言葉に合わせるように画面が切り替わる。むんがいた階段の踊り場を上から見た映像だ。四角く区切られた床がかなりのスピードで降下している。

〈W I B Aの通常エリアと、この競技場は、そもそも繋がってはいない。こういう仕掛けを通らないと、来ることができないようにしてあるんだよ。だからここは地図にも載っていない。一種の隠れ家なのだ〉

真佐吉は得意げに説明した。

「フン、まるで自分の家みたいな口振りだな。ええ？

伊里江博士サンよ」

しばらくのあいだ黙っていた雛田が、ゆらりと立ち上がった。手は依然、清香のケースに置いたままだが、その声からは最前までの泡を食った調子が消えていた。

〈家だよここは〉今度は真佐吉も素直に相手した。〈この日が来るのを、この琵琶湖の水面下ですつと待っていたのだ。君のように夢をあきらめたりしないでね〉

「どこで検索したのか知らないが、僕の話はもういい」
雛田は挑発に乗らない。「考えたら、お前さんの人を見下した物言いなど、我が愛すべき相方、影松豊の足許にも及ばん。なにしろ奴の辛口は名人芸の域に達していたからな。お前は検索がうまいみたいだから、我々の過去の漫才映像を探して研究してみたらどうだ？」

真佐吉は度重なる真佐吉の不遜な言動に、いい加減、頭に來たらしい。

「カゲのツツコミは、そんじよそこの奴が真似できる代物じゃない。彼には聞く者を包み込む愛情があった。だからこそ僕はずっと彼についていったんだ。僕にツツコめるのはカゲだけだ。お前みたいな人を人とも思わない奴に上からモノを言われる筋合いはない」
「そんな風にキレたから、業界を追放されたんじゃないのかね？」
「クククという笑い声が挟まる。」「それに私は漫才をしているつもりはないのだが？」

雛田はこれ見よがしに肩をすくめ、ため息をついてみせた。

「情けないね。今の時代、得たい知識を手に入れることは簡単になったが、生活を豊かにする知恵がなければ、こういう人間が生まれるんだな」
軽く振った首をやや傾げて、「アンタ、友達も彼女もいなかったら？」

「必要を感じなかったのね」

「だろうな。それにここにいる皆さんも」ぐるりと見回す。「お前のころざしに賛同したとか、自主的にボランティア参加したとかじゃなさそうだな。どの顔にもイヤイヤ手伝わされてますと書いてあるよ。少なくともお前には人を惹きつけるカリスマ性なんてのは、これっぽっちもないんだ」

「ポケ専門の雛田君が、やけにしゃべるな。それで？」
真佐吉は楽しそうだ。会話を楽しんでいるようにも聞こえる。それに対して、饒舌じょうぜつに拍車をかける雛田のこめかみや首筋には滝のような汗が落ちていた。萌黄はハツとした。

（時間を稼いではるんやな。どこかに突破口を見出そうとして）

萌黄はそう合点し、あらためて、真佐吉の言う協力者たちを観察した。耳に同じタイプの通信機をはめていること以外に共通点はなく、服装も年齢もバラバラ。ただ、膨らんだポケットや、上着やシャツの陰からピストルらしきものが覗いているのが不気味だ。

「お前が一方的に『必要』とした皆さんを、どうやっておびき寄せた？ 大学の助手たちみたいに、他人に言えない弱みをつかんで強請ゆすったか？」雛田はしゃがんで、構造物のすぐ下にいた萩矢に声かけた。「アンタは何て言われて、ここに来たんだよ？」

萩矢は目を合わせず、「自分から進んで……」とつぶやいた。

「ウソだね。それが本当なら、裸踊りでも裸でバンジージャンプでも、何でもしてやろうじゃないか」

それを聞いて、真佐吉はハッハッハと高笑いした。

〈裸が好きなんだね〉

「いやいや」雛田は軽く手の平をひらひらさせると、「裸と言つても、僕は自分の服を脱ぐだけさ。アンタのように覗き趣味なんかないよ」

へん？ 話が飛躍して読めないが？

今度は雛田が笑った。

「ごまかしちゃいけない。さつき見せてもらったハモリさんの映像だよ。他人の携帯電話に勝手に侵入した話さ。どうやったかは知らないが、アンタにとっちゃ、他人のプライベートを覗くなんて、朝飯前なんだろうな」

他人の携帯への侵入。それこそまさにギドラの十八番おはこではないか！ 萌黄はポケットの上から携帯を押さえた。

雛田は舌鋒ぜっぽうをゆるめない。まるでカゲが乗り移ったかのように、真佐吉に対して中傷し続ける。

「今日び、P A I 相手なら、秘密であろうが何だろうが洗いざらいしゃべっちゃう人間ばかりの世の中だ。アンタはここにいる連中の携帯に忍び込んで、ひとりひとりの私生活を覗き見て、脅す材料をあれこれ物色したん

だろうな。友達もいなくて暇なアンタらしい趣味だ。僕にはアンタがパソコンに齧^{かじ}りついて、夜な夜な他人の秘め事にうつつを抜かす様子が目に浮かぶよ。ハハハハハ、世界を騒がせた伊里江真佐吉博士ともあろう御人が、実は盗聴マニアで、盗聴ネタを元に人を強請る、世にもチンケな男だったとはな。大笑いだぜ。アハハハハハ」

最後はもうやけくそである。どう足掻^あこうが勝ち目のない戦いである。雛田はしゃべってるうちに、自分を囲む無口な男たちが、漫才にウケてくれない厄介な客に思えてきて、やっていることがだんだん虚しくなってきた。笑い声にも力がこもらない。雛田は清香の横に膝をついた。もう好きにしやがれと思った。

〈……貴様〉

その声が聞こえた時も、声色のあまりの低さに真佐吉のものとは思わなかった。

〈……芸人ごときが、私にケチをつけるんじゃない！〉
その声に含まれる予想外の怒気に、雛田はひえつと叫んで構造物の上に転び、危うくアリーナへ落ちるところだった。

萌黄も目を白黒させた。それまで王様のようにふんぞり返っていた真佐吉が、いきなりキレたのだ。

〈オイツ、萩矢。そのバカ芸人を撃て！〉

居並ぶ男たちが一斉に身体を引いた。皆の目が最前列

にいた萩矢の後頭部に注がれる。突然注目を浴びた萩矢は、震える指を自分に向け、

「わ、わたしが撃つんですか……？」

「そうだ。早くやれ！ さもないとどうなるか判ってるだろうな？」

萩矢はまるで蛇に睨まれたカエルのように硬直し、上着のポケットから黒光りする銃を取り出した。しかしその手は極度に震えていて、到底撃つことなどできそうになかった。

「す、すみません。身体が言うことを聞かなくて……」

「言い訳はいらん！」

萩矢は頭の上からシャワーを浴びたかと思えるほど、多量の汗を噴き出していた。構えた銃を雛田に向けようとするも、震えるあまり、指を滑らせ、人工芝の上に落とってしまった。

「貴様も役立たずか！ それなら、六道！」

ゲツという声を漏らしたのは、これも見覚えのある体育教師風の男だ。

「六道、いますぐ、萩矢の額を撃つんだ！」

6

六道と呼ばれた男は、迷いもなく手にしていた銃を萩

矢に向けた。

「萩矢さん、アンタには恨みなんかあらへんけど、しやあないねん。判るやろ」

そして躊躇なく引き金を引いた。

——やめてっ。

六道の手から銃が跳ね飛んだ。おおっとどよめきの声があがった。

手首を押さえながら六道は周囲を見回した。「誰や、邪魔すんのは！」

その視線が萌黄のそれと交錯した。萌黄の手がいかにも手刀を斬った形で伸びていたからだ。

六道は唇を歪めて笑うと、銃を拾い上げることもしせず、骨組みに手を伸ばし、構造物を昇り始めた。そして、射すくめられたように動けない萌黄のすぐ足許に迫ると、

「お嬢ちゃんは、リアルなんやてねえ」

言うが早いか、萌黄の足首をつかんで、そのままぐいと下方に引っ張った。萌黄は数メートル下の人工芝に背中から落下した。反射的にエアクッションを敷いて受け身をとったものの、虚をつかれたため、出来は不完全だった。

「うぐっ」

床の上で身を仰け反らせてうめく萌黄に、六道は手を伸ばして彼女の顎をつかんだ。

「ひどいことするなあ。見てみい」六道は左手首を萌黄の目の前にかざした。「こんなに赤おなつてもた。内出血しとる。身体の中で砂状化とかいうのが起きとんのや。お嬢ちゃんのせいやで」

「やめろ」雛田があわてて骨組みを降りようとした。

「アンタが銃なんか振り回すから——」

「ヴァーチャルは引っ込んで!!」

六道はドスの利いた声で雛田を制止すると、萌黄の顎にかけた指にさらに力を込めた。萌黄はされるがままだ。「なあ、お嬢ちゃん。アンタみたいなりアルが、俺らヴァーチャル相手にパワー使たりしたらあかんわ。ええか？ アンタは超人なんやで。アンタは叩いたくらいのもりでも、こっちにしたら生死に関わる問題になりかねん。そやから——」六道はさらに顔を寄せた。「判るな？ 俺らはひ弱なアリやねん。そやさかい、リアルパワーっちゅうのは封印してくれ、ええな？」

六道の指が離れると、萌黄は膝からストンと人工芝の上へ落ちた。

六道は銃を拾いながら、手を耳にあてて、何ごとかを聞くそぶりをした。萌黄がわずかに顔を傾けると、彼の耳の中の通信機から漏れる声が聞こえた。

「そのへんでいい。早く彼女をカプセルに入れてくれたまえ」

リアル耳がキャッチした真佐吉の声だ。

六道は小さく頷いた。その冷徹な横顔に、萌黄は背中を冷たい汗が伝うのを感じた。

銃の扱いに手慣れたところを見せた六道。ここに来る前は、体育教師などではなく、もつと血なまぐさい職業に身を置いていたのではないか？

六道は無駄のない動きで萌黄の肘をつかみ上げると、構造物に向けて顎をしゃくつた。

「カプセルの中に入れ」

「で、でも、むんが……」

六道はまた通信機に耳を傾けると、

「再会はカプセル越しにしたらええやないか」

そう言つて無理矢理萌黄を立ち上がらせた。まるで犯人を連行するような空気をこの男は身にとっている。

釘を刺された手前、萌黄はパワーを使って抵抗することもためられ、言われるままに構造物の周囲を巡って、空のカプセルの前まで連れて行かれた。

六道の指が骨組みの陰にあつた操作盤に触れると、カプセルが滑るようにせり出してきた。さらに床にするすると降りてくると、透明な上半分があたかもペンケースのように片側に開いた。

いつの間にか、萌黄はカプセルケースの縁にまで押しやられていた。ケースに取り付けられた黒い管が見える。

催眠ガスのホースだ。蓋が閉じたが最後、たちまちガスが噴出し、齋藤や清香のように外からいくら呼びかけても目覚めなくなるのだ。

(あかん、アカンやんか！)

萌黄は夢から醒めたように振り返った。すると、六道の握った銃が、骨組みの上にいる雛田にピタリと据えられていた。

「ぐずぐずしてると、俺の人差し指が勝手に動いてしま
いよるで」

六道は笑ってはいない。ひたすら義務を遂行するだけという表情。それは、彼の後ろに居並ぶ男たちにしても同様だった。

萌黄はいよいよ進退に窮した。

この期に及んで、萌黄はようやく男たちがアリーナに現れた意味を理解した。真佐吉にとって彼らは“盾”なのだ。リアルの相手としてヴァーチャルをぶつけ、心理的にパワーの使用を封じ込めようという。もつとも同じリアルでも、柘などには通用しないだろうが。

(つまり、わたしの性格を読まれてるってことか——)
ひとりなら逃げる手もある。しかし、雛田を人質にとられていては……。

「ああ、忘れとった」

ふいに六道は軽い調子でつぶやくと、銃口を雛田から

萩矢に向け直した。

パンツ。

「ぐあっ」

撃たれた萩矢が、身体をくの字に折り曲げて倒れた。

六道が『忘れていた』のは、萩矢の処刑だったのだ。命令を遂行することに、六道は一切の疑念を抱いていない。萌黄は萩矢のそばに駆け寄った。背広を急いで脱がせると、ワイシャツに赤いシミが広がっている。

「おいコラ、戻ってこんか」

六道の言葉に耳を貸さず、萌黄はワイシャツを切り裂いた。たちまち真っ赤な砂が噴き上がる。萌黄は構わず両手で傷口を押さえた。

手の平が瞬間的に熱くなった。これまでの経験で、リアルパワー放出のコツは十分つかんでいる。萌黄は全神経を集中して、傷の癒えるイメージを頭に思い描いた。

「よけいなことするな！」

熱のせいか、六道の声が奇妙に歪んで聞こえる。続いてパンツという発砲音。撃たれた銃弾は、萌黄の後頭部に小石が当たった程度の衝撃しか与えなかった。

やがて、熱は徐々に下がっていった。手をどけてみると、傷口はすっかりふさがっていた。萩矢の呼吸も安定している。もう大丈夫だろうと、萌黄は腰を上げ、ようやく六道に一瞥いちべつをくれた。

「もうええでしょ？ 命令どおり撃ったんやから」

「やかましい！ 今度は確実に額を――」

「ええかげんにして！」

萌黄の叫びがパワーとなって彼女の身体から発現し、周囲を取り囲む音たちに熱風となって襲いかかった。アチチツという悲鳴とともに、前のほうにいた男たちがあわてて避難しようとする。

六道も手を顔の前にかざしながら、舌打ちした。

「くそっ、こんな化け物のせいで、おれの家族が……」

その独り言を聞き、萌黄はハツとなった。

「家族？ ……人質に取られてるんですか？」

「……」

六道はしまったという表情をしたが、それを隠すようにドスンと床に胡座あぐらをかいた。彼が思わず口走ったことで、男たちが何らかの形で脅迫され、強制労働させられていることは確実となった。

「なんてこった……」

構造物の上から首を伸ばしていた雛田にも聞こえたらしい。雛田は少しの間、骨組みに額を押しつけると、すぐに上げ、

「おーい、真佐吉いいーっ！」

と意を決した表情で怒鳴った。

へ大きな声を出さなくとも聞こえる。そのリアルボール

には感度のいいマイクが備え付けてあるのでな」

真佐吉の声は低い。まだ怒りは解けていないようだ。

「何か言いたいことでもあるのか？」

雛田は正二十面体の面のひとつに、両足を揃えて正座した。

「僕が悪かった。このとおりで。許してくれ」

一語一語噛みしめるような声が、空中に吸い込まれていく。

「今さら、命乞いか？」

「そうだ。口が悪いのは芸人のサガなんだ。アンタにも事情があるだろうに、一方的に非難したのは言い過ぎだったと反省している。それに僕の発言が誰かを傷つける引き金なんかになっては、たまったもんじゃないんだ。どうか彼らを許してやってくれ。このとおりで」

雛田は頭を骨組みにこすりつけながら、一気に謝罪の言葉を吐き出した。

彼も清香を人質に取られている。本当に守りたいのは、自分の“娘”なのだ。ひたすら頭を下げる雛田の姿は見るに忍びなかったが、萌黄には、真佐吉の心がわずかでも変化することを期待して、静かに成り行きをうかがうしかなかった。

静寂が降りた。大勢の人間が集結するアリーナに、くしゃみひとつする者はいない。

やがて真佐吉はフンと鼻を鳴らす音を場内に響かせた。そして、威厳を誇示するかのような低い声で、意外なことを言い出した。

〈その程度の謝罪で許せるほど、私は広い心の持ち主ではない。君は我が親愛なる協力者たちの面前で私を罵倒したのだ。君が本気で謝ろうというなら、いつそのこと、集まった皆さんにも、ちゃんと聞いていただこうじゃないか〉

たちまち軽いハウリング音がして、雛田の息遣いが競技場の隅々に響き渡った。

〈さあ、言いたまえ。私はこんなに愚かな人間ですと〉

7

男たちの顔に、一斉に緊張が走るのが肌で感じられた。雛田は少しばかり困惑の表情をたたえてうつむいた。

その向こうには、カプセルの透明ケース越しに、彼の娘である清香の背中があった。

〈遠慮することはない。まあ聴衆は男性ばかりで、はなはだ恐縮ではあるがね。君の声はこの競技場のメインスピーカーから流れるようにした。さあ早く始めたまえ〉

真佐吉は毒を含んだ声で催促した。しかし雛田は戸惑いを深め、

「僕はただ、アンタに謝りたいだけで——」
へ口答えるな。ちゃんとやらないと、次の犠牲者が出ることになるぞ」

そして再び静寂。男たちは構造物を囲んでまばらに突っ立ったまま、じつと雛田を見つめている。まるでゾンビの集団だ。どの顔も血色の悪さが目立つのは、ずっと地下で生活させられていたせいだろう。

そんな彼らを前に、真佐吉に謝罪しろという。真佐吉は雛田をさらし者にしたいのだ。恥をかかせたいのだ。

「ええっと、高い所から失礼して、お集りの皆様に申し上げます。ワタクシの失言にて、皆様を不快な立場に追い込んでしまいましたことをお詫び致します。ごめんなさい」

雛田の声は朗々と響き渡り、続いて彼はぺこりと頭を下げた。

すると男たちの一部に変化が生じた。「アイツ、カゲヒナタの片割れじゃねえか」とささやく声も聞こえた。

へ——それで終わりか？ バカ芸人」

真佐吉の声が怒気をはらんだ。

「これ以上、何を……」

へ私に言わせたいのか？ まったく愚民というのは救いようがないな。本来なら貴様のごときくだらん芸人風情が、私という選ばれし者とこうして会話を交わせること

自体、奇跡なのだが、な」

萌黄のはらわたは煮えくり返った。何が選ばれし者だ。〈面倒くさいが、貴様ごときに、私に対して意見する価値などないことをたっぷりと教えてやろう。〉

——雛田義史！

「ハ、ハイ」

フルネームを呼ばれて、思わず肩を強張らせ、丁寧に返事してしまったのは、長年の不遇な生活のうちに染み付いた、悲しい習性だ。

〈貴様、昨秋、演歌歌手のミエコを連れて東北を巡業した時、会社の金を着服したろう〉

雛田のこめかみをねっとりとした汗が伝った。

〈貴様が各所で支払った金額と、会社への請求額が十万ほど合わないのはなぜだ？〉

「そ、それは……生活苦で——」

〈この春のことだ〉真佐吉は淡々と続ける。〈駆け出しの男性アイドルグループ、ノワールブルーの熊本公演に同行した時、直前にメンバーのひとりが脱退して、六人になっていたにもかかわらず、予定どおり部屋を七つ用意し、その一室を貴様が使用したんだ。それだけじゃない、グループのファンの女の子を部屋に連れ込んだそうじゃないか〉

「違う！ あれはグループに会おうとホテルに潜り込ん

できた少女を説得して帰らせようと思い——」

「彼女は貴様に迫られたと、自分のブログに暴露していたぞ」

「でたらめだ！ 断じてそんなことはしていない！」

「さあ、どうだか……。結局、会社は、いや社長であり君の元相棒でもある影松豊は、示談で解決したようだがな。それなのにネット上で暴露されてしまうなんて、子供相手の商売はつくづく、うまくいかないものだね」

「……………」

「もう少し紹介しようか。——君はつくづく女性とのトラブルの多い男だな。低俗な芸能週刊誌の公式サイトで過去ログを検索してみたのだが、いやはや何とも凄まじいではないか」

真佐吉はカラカラと笑った。

「ほう、こんな記録もあるぞ。なになに、『夜の六本木の路上で、カゲヒナタの雛田、ファンに蹴飛ばされ、あわや車にひかれそうになる』か。こんな出来事のどこにニュースバリューがあるのか、理解しがたいね。じつにくだらん。——おや？」

ギクリとした拍子に、雛田の顔から汗が飛び散った。

「警察のサーバには、ファンの女性側の言い分として、ひかれそうになったのは自分だと書いてある。この女性の名前で検索してみよう。——ふむ、女性は君を告訴

しようとしたらしいね。ところが後になって取り下げて
いる。さらに彼女は虚妄癖があるとして入院させられ、
二十年を経た今もまだ退院していないそうだ」

「……………」

雛田は目を閉じて、身体が震えるにまかせていた。

（あの頃は……碧と別れた寂しさから、極度の自暴自棄
に陥っていた。仕事をしているあいだは忘れることもで
きたが、夜になれば碧のことばかり思い出し、気持ちの
コントロールが利かなくなることもたびたびだった）

突然、真佐吉は口笛を吹いた。

へこれは素晴らしいお宝を発見したぞ。なんと彼女のP
AIにアクセスすることに成功した！ それによるとだ
な……彼女は今でもPAIに繰り返し言を聞かせるのが日課
になっっているらしい。PAIのメモリにはこんな言葉が
記憶されている。『雛田さんは嘘をついた。被害者の私
は、加害者に仕立て上げられた』と――」

「もうたくさんだ！」雛田は叫んでいた。これ以上は耐
えられない。「アンタの言うとおりでだよ。僕は目撃者が
いないのをいいことに、嘘の証言をした！ 事件になる
のを恐れたんだ。彼女の人生をメチャメチャにしたのは
僕に間違いない！」

へほう、認めるのだね、自分がヒドい人間であると」

「……そう言われてもしかたがない」

〈そうか——。ところで後ろを見たまえ〉

真佐吉の言葉に操られるように、雛田は首をねじると、彼の目は予想もしなかったものを捉え、愕然とした。

眠っていたはずの清香の目が大きく開かれ、じっと雛田を凝視しているではないか。

「な——なんで？」

雛田は激しく取り乱した。まさか今の話を——？

へハツハツハ。つい数分前、覚醒ガスを流し込んで、清香さんには目を覚ましてもらったのだよ。もちろん君の話をいっしょに聞いてもらおうと思ってね。おっと、言い添えておくが、カプセルは外の声は聞こえても中の声は聞こえないようになっていゝる

清香は眉根を寄せて、何かを訴えようと口を動かしているが、かすかな声さえも聞こえてこなかった。

〈彼女は君の告白を全て聞いていたよ。感想を聞いてみようか？ 私だけが直接、会話できるようになっている。……やあ、影松清香さん。お目覚めのところにいきなりシヨッキングな話を聞かせられ、さぞかし驚いていることでしょう。本来なら一流の音楽家であるあなたの耳を汚したくはなかったのだが、どうしても聞いてもらう必要があったのでね。それというのも——〉

「やめろ！ やめてくれ！」

雛田は喉が張り裂けんばかりの声で叫び、真佐吉の声

を遮ろうとした。

（清香はどこから聞いていた？ まさか……まさか！）
〈どうしたんだい？ お笑い芸人がお客さんに対して、
そんな真剣な顔を見せてはいけないねえ〉

「頼む！」雛田は哀願の目を天井に向けた。「許してく
れ！ 僕が最低の人間であることは認める。だが……こ
れ以上はもう……勘弁してくれ！」

〈いいだろう〉

意外なほどあっさりど、真佐吉は承諾した。雛田は肩
の力が抜けたが、それでも顔を上げない。

〈ただし、最後のノルマを与えよう〉

「ノルマ……？」

〈そうだ。君は私を罵倒した。その反対の言葉を口にし
てくれればいい〉

「反対の言葉……」

雛田は記憶をまさぐった。

彼は真佐吉を、強請るネタを探して他人の携帯を盗聴
する “チンケな男” と評した。それを否定しろというの
か。

「……そのー、アンタは盗聴マニアなんかじゃない」

〈それで？〉

「……誰かを強請るなんてことはしていない」

〈それから？〉

雛田は頭を抱えた。何だこれは？　こんなことにどんな意味があるっていうんだ？

〈さあ、続けたまえ〉

続けるろったって。

「……アンタは、その、チンケな野郎なんかじゃない。

立派な学者さんだ」

〈もつと大きな声で！〉

こんなの、大人の会話じゃない！

「アンタは、世界一優秀で立派な学者さんだ！」

〈名前を入れて！〉

「ウツ……、伊里江真佐吉は、世界一優秀で、聡明で、立派な物理学者だア!!」

最後はもう意味も考えずに、ただただやけくそに喚いただけだった。

汗が顔や手首から黒い骨組みへと伝い落ちる。ずっと大きな声で話していたため、喉は枯れて無性に渴きを覚えた。唾を飲み込むと、その喉がずきんと痛んだ。

また、拍手の音が競技場の空に鳴り渡る。当然、真佐吉が叩いているのだ。

〈よくできました。いい子だ〉

その声には、つい今しがたまでであったとす黒い悪意が消えていた。真佐吉は上機嫌な口振りで、それでも以前と同じ傲慢さで言葉を続けた。

〈弱みを握られ、脅されながらも、脅されていないと言
う。信念のない人間とは、じつに見下げ果てたものだな。
こんな男が、君の実の父親だなんて、私には到底信じら
れないよ、清香さん〉

8

「だあああーっ」

動物じみたがなり声が、萌黄に現実感を取り戻させた。
雛田は伸ばした腕を振り回しながら、

「違う、違うぞ！」

と何度も首を振って否定する。真佐吉の声はそれを打ち
消すようにヴォリュームを上げ、

〈何をいまさら隠す？　せつかくの感動的な親子の対面
ではないか。私にも祝福させてくれたまえ。……とこ
ろで、清香さん、君は彼のことを単なる親しいおじさんと
思っていたらしいが、本当の父親であると知った今、ど
んな感想をお持ちかな？〉

萌黄は胃の中がムカムカするような不快感を味わって
いた。

そのあわてぶりからして、雛田は清香に親子の名乗り
を上げるつもりがなかったか、あるいは名乗るタイミン
グを見計らっていたのではないかと、萌黄は想像した。

父親との複雑な関係が続いた彼女ならではの勘だ。

しかし、当事者らにとつては、人生を左右するような重大事を、真佐吉はいともあっさり清香に告げてしまった。

雛田は拳を骨組みに何度も打ちつけて、怒りをあらわにした。こんな形で清香に知られてしまうなんて……。

しかしそんな悔しがりようさえ、真佐吉を喜ばせたようだ。

へあつははは。清香さん、ごらん。お父さんは泣いて喜んでるよ。君もうれしいだろう。長野で惨殺された影松豊氏は君とはまったく関係のない、赤の他人だったんだから。本当によかったね〜

真佐吉はあくまでも、人の心をもてあそぶつもりでいる。萌黄は見えていられなくなり、雛田から顔を背けた。それでも不快感はどうしようもなく募っていく。

彼女は支えていた萩矢の頭をそつと人工芝の上に置くと、反撃する手はないものかと、脳をフル回転させた。理屈で考えれば、どうしようもないほど絶望的な状況ではあるが。

（何か方法はあるはず。方法が——）

必ずある。リアルの勘がそう言っていた。萌黄は神経を極限まで研ぎ澄ませた。

すると腕の表面が、風もないのにざわついた。と同時に

に、空電のような、とぎれとぎれの声を耳にした。

『——も——え——ぎ——』

「むん！」萌黄は四方を見渡した。「どこに!？」

むんの声は、まるでデジタル通話のように、ぶつ切りになって流れてくる。

『——待って——て——助けたる——』

今度は途切れるとそれで終わりだった。だが萌黄には十分だった。

むんは望みを捨ててはいない！ 囚われの身となっても、萌黄に向かって思念を飛ばしてくれているのだ。

絆きずな

萌黄は今ほどかけがえのない友のありがたさを強く感じたことはなかった。

（大丈夫！ わたしもがんばるから！）

萌黄も思念を返した。返事はなかったが、届いたという確信があった。

萌黄は骨組みに手をかけて昇り出した。雛田のそばにいてやろうと思ったのだ。このままでは可哀想すぎる。

正二十面体を真ん中あたりまで昇った時、雛田がふらつくように立ち上がるのが見えた。

「お集りの皆さん」雛田の声は、まだ場内のスピーカーに繋がったままだ。「よつくご覧ください。かつては皆様のお茶の間をそれなりににぎわせた芸人が、生き恥を

晒さらしております！」

男たちの頭が動いた。やっぱりカゲヒナタか、だとか、ウワツ懐かしい、という声上がる。

「覚えてくださっていたかたもおられるようですね。大変うれしく思います。そうです、私はカゲヒナタの片割れ、雛田義史でございます。……お恥ずかしい話、羽振りのいい頃は羽目を外しもしました。人気の上に胡座をかいて、人を人とも思わぬ所業に走ったことも二度や三度ではございません。……たとえば、デビューして二年目、ペーパードライバーの私は運転したくてたまらず、マネージャーからハンドルを奪って、横浜の町を猛スピードで駆け抜けたことがあります。その時、信号待ちしていた車に突っ込み、乗っていたカップルをむち打ちにしまいました。……その時、私はやってきた警察に嘘の証言をしたのです『運転していたのはマネージャーだ』と」

男たちは静かになった。冷めた目線が雛田に集中する。「……売れっ子になり、人気も収入もトップに躍り出た頃から、私は後を追ってくる若手芸人たちに怖れを抱くようになり、彼らの芽を摘むことに躍起になり始めました。共演する時など、前もって楽屋で脅しをかけたたり、女の子を使ってスキャンダルの罫を仕組んだりということもしました。そうして見込みのある若手たちを次々と

追い落とし、大して才能のない者たちばかりを共演者に引き立てました。……じつに卑劣極まりない人間です、私という男は」

雛田は一息つくくと、あわてて言い添えた。

「ただし、やったのは私ひとりの考えです。影松はああ見えて、汚いことが嫌いでしたので」

チラッと清香のカプセルを振り返りかけて、すぐに顔を前に戻す。

「ここにいる影松清香は、ご存知のかたも多いでしょう、いま人気ナンバーワンの女性アルパ奏者です。……私はつい数日前、影松豊本人の口から、彼女が私の娘であることを知らされました。私にとっては青天の霹靂であり、受けた衝撃は人生最大のものでした。……彼女とは、彼女が小さな頃から手紙をやりとりする間柄でした。自分で言うのもなんですが、私をよく慕ってくれました。事実を知らない私は、彼女のような娘がいたらなと思いつつ、ずっと彼女の成長を見守ってきました。……彼女の存在は、私の心のオアシスでした。特に、私がトラブルを起こして芸能界を放逐されてからは、私の人生で唯一の支えでもありました。……でも、もう終わりです。私は彼女に、親子であることを告げるべきかどうか、これまでずっと悩んでいましたが……真佐吉によって……最悪の形で暴露されてしまった……」

いつの間にか、身振り手振りを交えての話になっていたが、その声がぷつぷつりと途切れた。

萌黄は、雛田がなぜ急に懺悔を始めたのか、理解に苦しんだ。そんな自虐的な行為は、真佐吉を喜ばせるばかりか、男たちの反感を買い、あまつさえ、清香を悲しませることになるではないか。

いや、それだけじゃない。

萌黄の目と雛田の目が合った。

萌黄は「もうやめて」と目で訴えた。カゲヒナタはお笑いマニアである萌黄の、永遠のアイドルなのだ。これ以上、夢を壊さないでほしい。そんな思いで眉を寄せたが、四十五歳の雛田の蒼ざめた顔からは、彼の思いを読み取るができなかった。

「私には父親になる資格など、ありやしないんです、ええ。……そういうえば、こんなこともありました。カゲヒナタで温泉レポートの番組に出演した時のことです。やる気満々のディレクターが、僕に向かって「足を滑らせたフリして、温泉の中に服を着たまま飛び込め」と、突然思いついた指示を出しました。僕は頭に來ましてね。ちようど我々は事務所を立ち上げたばかりで、多少、天狗になっていたんでしょう。くだらんと言って拒否したんです。それでなくても、ヤラセは僕もカゲも虫酸が走るほど嫌いなタチでしたんでね。ところがディレクター

は納得しなかった。オマエら、いい気になるなよ、芸人は言われたとおりに動けばいいんだ。ない頭を使おうなんて思い上がるな、とこう怒鳴りやがった。さすがに頭に来た僕とカゲは一計を案じた。そして、撮影の直前にカメラマンと示し合わせて、リハ中にカメラを回させました。僕たちはディレクターを言葉巧みに温泉のそばにおびき寄せると、ふたりがかりで奴を湯の中に思いつきり突き飛ばした。カメラマンは、ディレクターが勝手に転けたように見えるよう、抜群のアングルで撮影してくれた。もちろん僕たちはお叱りは覚悟の上。二度とその局では使ってもらえまいと思ってた。でもたまたま現場にスポンサーの社長が見学に訪れていて、これがまた信楽焼のタヌキそっくりの社長だったんですが、腹鼓をポンポン叩いて笑ってくれたんです。おかげで僕たちの首は皮一枚でつながったんです。映像はタヌキ社長の後押しで、無事オンエアされました。ハイ」

ここで男たちのあいだに控えめな笑い声が起きた。萌黄は我が耳を疑った。

「——このディレクターってのが、これがまたガマガエルのつぶれたようなツラした奴で、そんな奴が温泉の中で溺れてるんですよ。しかも奴は一滴の酒も呑めない男で有名でした。だから僕はオンエア時にこっそりテロツプを入れてやりましたね。『下戸、下戸』って」

だあーっと脱力気味の爆笑が湧き上がった。表情を失くしていた男たちのほとんどが頬をゆるめていた。どの目もキラキラと輝いている。中には涙を流している者ま
でいる。ひよっとすると、昔はカゲヒナタのファンだったのかもしれない。

初めはつかえ気味だった雛田のしゃべりが、今や堅さも取れ、淀みなく言葉が溢れ出てくる。

（——これって、まるで雛田さんの独演会みたい）

萌黄は笑うこともできずに、顔を真っ赤にしてしゃべくる雛田を見つめていた。

タヌキだの、ガマガエルだのと、雛田は持ち前の“暴想力”を全開にしつつあった。

9

雛田の話し振りはますます熱を帯びていく。上着を脱ぎ去り、ワイシャツの袖のボタンを外してたくし上げ、ネクタイを乱暴にゆるめながら、尽きることなく話し続けている。

その内容は、自らの半生を振り返って思い出される「恥ずかしい話」「失敗談」「ここだけの話」といったものばかりだった。その半数は、持って行きようによっては雛田を強請ることができそうな、キワドいネタばかり

りだった。

萌黄は雛田の正気を疑った。

真佐吉があげつらう前に、すべての弱みをさらけ出してしまおうとでもいうのか？

傍らで、嫌でも彼の話を聞かされる清香のことが気がかりだった。動けない上に、耳を塞ぐこともできない彼女にとって、今の状況は、まさに針のむしろではないか。
(やめたげてほしいけど……)

萌黄は骨組みにぶらさがったままの自分の身体を上へと、雛田の近くへと押し上げた。

また、どつと爆笑が起きた。萌黄は高みから男たちの様子を眺めた。

先ほどまでアリーナに沈殿していた重たい空気は、すでにどこかに消え失せていた。男たちは正二十面体を中心に距離を詰め、半数近くが人工芝に腰を落としている。

雛田のしゃべりが彼らの心を溶かしたのだ。

緊張を和らげた男たちに対して、雛田は狭い骨組みの上を、右へ行き左へ行きと身体を移動させ、取り囲む男たちに等分に語りかけている。汗みずくの顔はにこりともしない。萌黄はカゲヒナタの漫才を思い出さずにはいられなかった。

『笑うのはお客さんの役目。我々が笑ったら、それを奪うことになっちゃうでしょ？』

影松豊の名言である。バスター・キートンを敬愛する彼らならでは、といったところだ。萌黄が惹かれたのも、彼らがお笑いに対して、常に一途で真摯なところだった。それはともかく。

雛田のテンポが少しずつ落ちてきた。ピンで切れ目なくしゃべり続けているのだ。疲れて当然だろう。

チャンスと見て、萌黄は雛田の傍らにすり寄った。

「もう十分ですよ。そのくらいにしておかないと、喉を痛めて、砂状化を起こすかも」

萌黄が言うと、雛田はハツとして言葉を切り、湯気のとつ頭を何度も頷かせた。

骨組みの上からは、アリーナがよく見える。男たちは、次に雛田がどんな話をしてくれるのかと、目を輝かせている。

「あー、ゲホゲホ、以上で私の話を終わりにしたいと思っています。ご清聴、どうもありがとうございました」

雛田が締め挨拶をした。たちどころに、えーっという非難の声と拍手が巻き起こった。

雛田にとっては意外な反応だったらしい。のけぞりながら三百六十度をぐるっと見渡している。

さらに大きな拍手が頭上で鳴った。真佐吉である。

へブラボー、素晴らしい！ どれもこれもバカバカしい話なのに、つい聞き入ってしまったよ。いやはや、話芸

というのも侮れないものだな

真佐吉はそう言つて、ひとしきり笑うと、六道の名を呼び、命令した。

「お楽しみはここまでだ。光嶋萌黄をカプセルに放り込め」

男たちから笑みが消えた。再び真佐吉の恐怖政治が復活しようとしている。

「光嶋萌黄よ、悪あがきはするな。今度こそ君の友人が死ぬことになるぞ」

最後通牒が突きつけられた。

雛田が「待ってくれ！」と怒鳴るが、すでにマイクは切られていた。

萌黄はひとまずエアクッションで自分と雛田を包み込んだ。悪あがきではあるが、時間を稼ぐしかない。

「六道、さあ、目にももの見せてやりたまえ」

命じられた六道は一步前に出ると、銃を持つ腕を高く上げた。

萌黄は固唾を飲んで、彼の挙手を注視した。

しかし、六道はそのままの姿勢で手の平を開いた。銃は六道の手を離れ、足許へと落下した。

「――！」

時間が止まったように感じられた一瞬だった。六道はわずかに歪めた唇を開くと、はつきりと言った。

「雛田さん。聞いてくれ……俺はアンタとは比べ物にならない、最低の男だ。なぜなら——俺は人を刺しちまつたんだからな」

六道はフーツと息を吐くと、どっころらせと芝の上に座り込んだ。

「——アンタ、何者だ？」

雛田はおそろおそろ訊ねた。

「俺かい？ ただのしがない刑事だ」

萌黄は納得した。

（そうか。あの迫力はただ者やないと思た^{おも}）

「しかし、刑事が、なぜ……」

「へへっ」六道は短い頭髪をガリガリと搔くと、「ヤクからみでね——俺は麻薬取引の潜入捜査をしてたんだ。

その過程でつい手を出してしまい、やめられなくなっちゃまった。あげくが、落ちるところまで落ちてしまつてさ。入手を焦つた俺は、我を忘れて売人を刺しちまつたつてわけだよ」

「そ、それがもしかして」相手が刑事と知って、雛田の言葉は自然と丁寧になった。「真佐吉に握られた弱みですか？」

「そういうこつた。——バレると、妻や三人の娘は一生、陽の当たらない生活を送らなきゃならないぞつて脅されてね」

「俺は！」唐突に六道の後ろで手が挙がった。大学生くらしいの若者だ。「俺は——高校の時からの方引き常習犯なんです。……ずっと見つからずにいたのに、ある日、電話がかかってきて、琵琶湖に來い。來ないとすべてを親と学校に教えるぞって……」

「わ、私の話を聞いてもらいたい！」

「お、お、俺も！」

手に手を挙げる男たち。彼らは口々に自分の弱みを話し始める。

場内はさながら暴露大会と化した。男たちは我先にと雛田のもとに押し寄せ、勝手に自分の弱みを告白し出した。

「待て待て、僕は牧師じゃない！ 告解こっかいなら教会に行つてくれ、教会にい！」

雛田は叫ぶが、聞く耳を持つ者など誰もいない。六道は笑いながら、

「今さら逃げられんよ。火をつけたのは雛田さんだ。俺だって、アンタのバカ話を聞いているうちに、なんだかどうでもよくなっちゃまったんだからな」

「それでいいんですか？」 萌黄は訊ねずにはいられない。

「ん？」

「真佐吉さんは秘密を——」

「娘さん——萌黄さんだったか。俺もそれほどバカじゃ

ない。アンタらの会話に出てくる話を総合すると、どうも穏やかならぬ情勢が読み取れた。世界が消えて亡くなるとか、爆発するとか。どうやら世迷い言ではなさそうだ。とすれば、俺のネタなんてちっぽけなモンだろう。そうじゃないか？ ぜひとも真相を教えてもらいたいね。俺たちは真佐吉に操られて、一体何をしようとしていたんだ？」

騒然とするアリーナの空気に飲まれて、半ば呆然としている萌黄の目に、雛田がまさぐっていたポケットから携帯を出すのが見えた。

「オイ、カバ松、いるか？」

《いるぞ。ずいぶんとにぎやかだな》

雛田はPAIと会話している。

「さつきは呼んだのに返事しなかつたな。何かあったのか？」

《俺にも判らない。突然、メモリが満杯になって、身動きがとれなくなつたんだ。ウイルスメールでも受け取つたかな》

「そんなはずあるかよ。だって、アンテナ状況はずっと圏外のままだぞ」

その時、萌黄の脳の奥深いところで、小さな火花がはじけた。バラバラだったパズルのピースが合体し、おぼろげながら一枚の絵が浮かんできたのだ。

(真佐吉さんは……)

萌黄が心臓が高鳴るのを覚えた。もしも、彼女の考えが正しければ――。

男たちが一斉に動きを止めた。耳の中に収めた通信機に聞き入っている。しかし、ひとりが通信機を抜き取って床に叩き付けると、他の男たちもそれを真似始めた。中には、他人の耳に飛びつき、捨てる、いや待ってくれと押し問答している者もいるが、ほとんどの男は真佐吉に反旗を翻すことを決断したようだ。

「みんなで捨てれば怖くない、か」

六道はつぶやき、骨組みに指を掛けて身軽によじ登った。そして、ぶら下がった空のカプセルのひとつに腰かけると、両手でメガホンを作って雷のような声を発した。

「お前ら、静かにしろい！」

さすがは刑事。恫喝が堂に入っている。

辺りが水を打ったように静まり返ると、六道は萌黄を促した。

「そ、それじゃあ、手短にお話します」

萌黄は早口で語った。いつ、真佐吉が次のアクションを起こすか判らないからだ。

男たちが拉致されたのはヴァーチャル世界誕生の直後だったので、真佐吉に関する知識は少なかった。萌黄は、北海道消失事件の犯人は真佐吉であることを教え、そこに至る経緯から話し始めた。

彼は科学者として多大な成果を収めたが、逆にそれが命を狙われる原因となり、失踪。そして自分を取り囲む状況に絶望し、怒りの矛先が政府に向かった。身の安全と行動の自由を保障するよう要求したが、政府はこれを一蹴。真佐吉は自らの力を誇示するため、北海道を小型ブラックホールによって消してみせた。真佐吉は重ねて要求を突きつけたが、政府、というより「テロに屈しない」山寺総理は耳を貸さなかった。

そして、このヴァーチャル世界が生まれてしまった。リアル世界を破壊するために。

「……信じられん」

六道たちは予想どおりの反応を示した。萌黄は訊ねた。「砂状化——ここにいるかたがたで、怪我で身体が砂になった人はいませんか？」

「いや、特には——」

萌黄は片手を差し出した。手の平をゆっくり持ち上げると、六道の身体がふわりと浮いた。男たちがワツと叫んで散る。

「これがリアルパワーです。わたしはこの世界の人間で

はありません」

雛田が骨組みの上から萌黄を呼んだ。

「清香を出してやりたいんだが、カプセルの開け方が判らない」

萌黄は浮いたままの六道を操って、正二十面体の真上に移動させると、雛田の脇に軟着陸させた。

「お願い。カプセルを開けてあげて」

萌黄の願いに、六道は驚きが治まらないまま、了解したと、手を挙げて応じた。

男たちもひとりまたひとりと、清香の下に押し寄せる。

ある老人が雛田の名を呼んだ。顔を上げると、

「私はテレビを観ない人間だ。だから雛田さんのことはよく知らないんだが、さっきのお話はすこぶる面白かった。十年ぶりに笑わせてもらった。ははは」

若者がその老人の背中を叩いた。

「ダメだなあ、ジイさん。この人は伝説的な存在だけぞ。

おいらなんか、もう涙モノだよ。——で、ジイさんの弱みは何だったんだい？」

「なあに、ちよいと昔、三億円をかつぱらっただけさ」

いつしか雛田コールが湧き上がっていた。雛田は清香のカプセルから顔を上げると、信じられないという顔で男たちを眺めた。数百人全員が彼の名を連呼している。

《ウヒョーっ、一躍人気者じゃないか、雛田サンよ》

「ああ……」

カバ松のひやかしも雛田の耳に届いていない。

《亡き相棒の言葉を思い出さないか？》

「え——？」

《『まったくお前の話芸だけは予測不能だよ。いつかその笑いが世界を救ったりするんじゃないのか？』》カバ松は、影松の声を再生した。《彼の言ったとおりにになったじゃないか》

「やめろよ、僕はそんな柄じゃない」

ガクンとカプセルの蓋が揺れた。雛田はすかさず蓋の隙間に両手を入れ、気合い一発、重たい蓋をひっくり返した。

「——おじさま」

「清香……」

男たちは、待ちに待った感動の対面シーンだぞとばかり、歓声とともに拍手の嵐を捧げた。

ひとり、萌黄は冷静だった。

「六道さん、あっちの齋藤さんもよろしく！」

「よしきた」

刑事は敏捷に動いた。

しかし、萌黄が骨組みの上で立ち上がった時だった。

「萌黄いいーっ！」

それは、数日ぶりに聞く友の声。萌黄はハッと顔を上

げ、目で相手を確認する前に、空中高く飛び出した。

アリーナの隅の壁には、いつできたのか、四角い穴がぽっかりと空いていた。暗がりやを背負ってそこに現れたのは、紛れもない、むん、その人だった。

「むうううううーっ」

十メートルの距離を滑空した萌黄は、勢い余ってむんの胸元に飛び込み、ふたりはごろごろと転がって、後ろの壁に突き当たり、ようやく止まった。

言葉はいらなかった。互いに流す涙が相手のTシャツを濡らした。

「むん、聞いて聞いて。わたしね、何度もむんの声を聞いたんやで」

「えっ、ホンマに？」

「そう、テレパシーみたいに。わたしも返事したけど、聞こえへんかった？」

「うーん、ごめん」

萌黄はがっかりはしなかった。何ととっても、むんはヴァーチヤルなのだ。

「——萌黄、これ」

むんが差し出したのは、萌黄のリュックだった。

「持ってきてくれたんやね」

「この子に比べたら軽かったしね」

むんの後ろには、炎少年が大の字になって寝そべって

いた。少年の頭に取り付けた携帯がしゃべり出す。

『あんまり同じ格好で放っておくなよ。床ずれしちまうじゃないか』

「もうちょつとマシな冗談を言いなさい。坊や」

むんは相手にしない。

と、その時、うわあーっという悲鳴が、穴の奥、斜め上方から落ちてきた。

「わたしらが落ちてきた通路や。萌黄、危ない！」

ドンとむんに胸を突かれ、ひっくり返った萌黄と入れ違いに、悲鳴の主が転がり落ちてきた。

「伊里江さんやない！」

かろうじてエアクッションで身を守ったのか、怪我はしていないようだ。彼は荒い息の下、すぐに目を開けると、

「……ここは……ここは、どこですか？」

「一番底にある競技場——どうやってここに来たん？」

「……むんさんが落ちるのを見て、すかさず私も飛び込んだのです……ところで、兄には……逢いましたか？」

萌黄はすぐに伊里江を起こし、自分の肩に背負った。

「自分の目で確かめなさい」

そう言って、伊里江の長い足を引きずりながら、アリーナへと出た。振り向くと、むんも炎少年を背負って立ち上がるうとしていた。

「わたしは大丈夫」むんが微笑んだ。「先に行つて」
萌黄は頷くと前を向き、雛田たちのところへと歩き出した。

「体調はどうなん？」

萌黄が見た伊里江の横顔は、血の気が全くなかった。
伊里江の噴き出す汗が、萌黄のシャツにも染みてくる。

「……劣悪です。歩くのもままならなくて……迷惑をおかけします」

「それはかまへんけど」

「……こうなることは、初めから判っていました」

「？」

萌黄の足が止まった。

「……私がこの世界に来るのに使った転送装置は……完全じゃなかったのです」

「！」

「……この世界に来たリアルは、転送の際、身体の細胞の一個一個に微細なブラックホールを内包することになります。……それがリアルパワーの源になるのですが、同時に身体には非常に大きな負担ともなります。完成版の転送装置には、おそらく解決プログラムが導入されていたはずですが、あの無人島にあったのは――」

「知つてて使つたん!？」

萌黄の詰問に、伊里江は苦しげな笑みを返した。

「……こんなにぎりぎりの日数になるとは思ってもいなかったのだ」

「どアホッ！」

人垣を掻き分け、ふたりが正二十面体に到着すると、開いたカプセルの中で、齋藤が伸びをしていた。

「萌黄はん。お久しぶりい」

こんな時にもものんきなジジイである。いや、現状を知らないのだ。

その時だった。場内の照明が一瞬消えた。とすぐにまた灯った。灯った明かりには色が付いていた。

「なんだア」

虹色に彩られた光だった。光は天空から降り注ぎ、やがて巨大な歯車が回転するように回り始めた。

へハツハツハ、我が弟も含め、いよいよオールスターの集合か。この時を待っていたよ

アリーナや正二十面体が、人々の顔までもが七色に移り変わる。まともに見えては酔ってしまいそうだ。

「あ、あそこ！」

起き上がった萩矢が驚愕の目で何かを指さした。

観客席の通路口から武装した一団が現れたのだ。どれも同じ黒いヘルメット、黒い服装、そして黒いマシンガンを抱えている。彼らはみるみる数を増やすと、アリーナを取り巻くように並び、萌黄たちに対して銃口を向け

たではないか。

「あんな連中がまだ隠れてたなんて」

萌黄が吐き捨てるように言うと、

「俺だって見たことがない」

と六道が言った。

へこれが本当に最後の指令だ。親愛なる男たちよ。リアルたちをカプセルに戻せ

タタタツとマシンガンのひとつが火を噴いた。

「ひいっ！」

アリーナの上を、掃射の線が走った。男たちは頭を抱えて逃げ惑う。狙う側は客席を完全に制圧していた。隠れるところはどこにもない。

誰もがおびえて正二十面体に身体を寄せた。

しかし、萌黄だけは違った。彼女は妙に気の抜けたような声を張り上げると、真佐吉をなじる言葉を並べ出したではないか。

「真佐吉のボケーっ、カスーっ、変態いーっ！」

11

回転する七色の光が、わずかに揺らいだように見えた。萌黄は勢いを得て、思いつくままに悪口雑言を連ねていった。

「真佐吉の世間知らずーっ、真佐吉の内弁慶ーっ、真佐吉のおー……えーっつと、嫌われ者おーっ」

子供の喧嘩レベルである。萌黄は自覚していたが、とにかく言い続けるのが大事だと確信していた。

リアルパワーのおかげで、マイクがなくても彼女の声はよく通った。ぐるりと取り囲む黒づくめの集団は、構えたマシンガンを下ろすことなく、じつと照準を萌黄に向けている。

「やめてくれ！」萩矢が両手を振りながら、萌黄に詰め寄った。「私らみんな、殺されてしまう！」

「大丈夫、ダイジョーブ」

萌黄は笑い返すと、エアクッションでくるんだ自分の身体を上空へと押し上げた。両の目をひたと武装集団に据えている。銃口は萌黄の動きに合わせて上向いた。

萌黄は少しも臆せず、両腕を左右に伸ばして、ピーターパンを演じてでもいるかのようにくるっど回ってみせた。そして大きく息を吸い込むと、ダメ押しの一手を指した。

「真佐吉はあー、世界一のおー、欠陥人間じゃー」

↑——撃ち殺せ！↓

どす黒く悪意のこもった号令が下った。

ガガガと銃弾が連射された。

その刹那、萌黄はエアクッションを消した。無防備の

状態に身を晒し、コンマ数秒の時間で迫ってくる銃弾を待ち構えた。

最初の弾が腰の辺りをかすめる。萌黄は身体をひねってそれをよけた。さらに脇腹目がけて飛んでくる弾を、紙一重でかわす。決して遊んでいるわけではない。彼女は必死だった。

そして集中力が極限にまで高まった時、一発の弾丸がまっすぐ正面から接近してきた。

(これで行く！)

光の速度で目星を付けると、片手を伸ばしたまま、身体をコマのように回転させた。かつて京都工大でハジメがやってみせた銃弾キャッチの技だ。

銃弾は彼女の手の中に収まった——はずだった。

回転にブレーキをかける。手の平を開くと、そこには何もなかった。痕跡すら存在しなかった。

「みんな、聞いて！」萌黄は空から呼びかけた。「あの連中は、ぜーんぶニセモノ！ 立体映像やよ」

まさか！ という驚きが上空からでも見て取れた。萌黄が骨組みの上に着地すると、六道が信じられんと首を振って迎えた。

「六道さんも、あんな連中、見たことないんでしょ？」

「そりゃそうだが」

「高い所からやと、よく見えました。あの人たちには影

がありませんでした。七色の光は、わたしたちの目をくらますため、影がないのをごまかすためだったんです」

「——しかし、撃たれた時、芝が飛び散ったぞ」

「空間に投影されたCG映像でしょう。跳弾の音も、現代の音響技術をもってすれば可能です」

「そんなことまでできるのか……。すると、どういふこととなるんだ」

「決まっています」萌黄は黒服たちを睨み据えた。「真佐吉には、もう打つ手はないということですよ」

六道は、あの連中は作りモンの映像だとよ、と萌黄の代わりに大声で皆に知らしめた。

銃撃を避けて芝の上に伏せていたむんがようやく正二十面体にたどり着いた。彼女は背負っていた炎少年を大儀そうに下ろすと、

「この子はホンマに無茶ばっかりして！」

と萌黄を叱りつけ、息が詰まるほどハグした。

あれほどいた黒づくめの集団が、煙のように跡形もなく消え失せた。場内を七色に彩った光の洪水も、元の平凡な照明に戻った。

真佐吉も声をひそめている。それだけに不気味だ。

「——？」

萌黄は、視野の中に動くものを認めた。数本のロープが天井にある滝の流出口から垂れ下がっており、迷彩服

たちが下降しつつある。ひとりはシュウだ。おそらく真佐吉も気づいているだろう。何も言わないのは、歯牙にもかけていないからか。

「……兄さん」

伊里江が呼びかけた。彼の身体は真佐吉の目につくよう、皆の協力で正二十面体の上に担ぎ上げられていた。ひとりで昇ることは体力的に無理だったのだ。

「……聞こえますか、兄さん。私です」

すると、真佐吉が平常の声色で応じた。

「真佐夫か。なんだそのだらしない格好は。だから早く元の世界に戻れと忠告してやったのに」

「……私は兄さんといっしょでなければ、帰らないつもりです」

「へもしくは、私を殺して、か？　小さな頃から正義漢のお前らしい一途さだな」

「……兄さん、もう終わりにしましょう。ここには兄さんの味方はひとりもいません」

沈黙。

「……あなたひとりではもう何もできませんよ」

また沈黙。

「……せめて姿を見せてくれませんか？」

しばしの間があつて、

「真佐夫よ。私が常に命を狙われていることは知ってい

るだろう？ 姿を現すことは、死の危険に——

「無理ですよね」

兄弟の会話に萌黄の声が割って入った。

「……え？」

「伊里江さん——あなたとしゃべってるのは、本当にお兄さんですか？」

「……」伊里江は戸惑いの表情を浮かべた。「……そうではないと言うんですか？」

「ええ」頷く萌黄。

「……何を根拠にそんなこと——」

「伊里江さん。あなたの耳も身体も、今は普通やない。気づかへんでもしょうがないと思う」

「お兄さんやなかったら、誰やていうの？」

むんが眉を寄せて訊ねる。

「誰でもない——」

「誰でも……」

そのセリフは、これまでのどの言葉よりも、まわりにいた者をひどく驚かせた。

「六道さん、萩矢さん」萌黄は問いかけた。「あなたがたは、じかに真佐吉さんに会ったことがありますか？」
ふたりとも首を横に振った。

真佐吉の姿を見たものはいないのだ。

「萌黄」むんが萌黄の顔を覗き込んだ。「それだけやな

いんでしょ？」

むんの期待のまなざしに、萌黄は笑みで返し、周囲の人々にも聞こえる声で話し始めた。

「さつき、雛田さんは真佐吉さんを怒らせてしまいました」

雛田の肩がビクツと震えた。

「真佐吉さんの性格は、皆さんも身にしみてご存知でしょう。常に人を人とも思わぬ尊大な態度で、自分を高みに起き、動揺などとは無縁でした。それじゃ、どうしても雛田さんに対してあれほどの剣幕で怒りを示したのでしょうか？」

「——僕が言い過ぎたから」雛田が抑えた声で答える。

「そうかも知れません。でもわたしは、真佐吉さんがキレる直前の雛田さんの言った言葉を思い出しました」

「僕が言った言葉？」

「はい。雛田さんはこう言いました。——伊里江真佐吉博士ともあろう御人が、実は盗聴マニアで、盗聴ネタを元に人を強請る、世にもチンケな男だったとはな、と」

雛田は口はぼかんと開いて、目をパチパチとまたたかせた。むんは誇らしげに自分の頭を指さすと、

「萌黄のココは、普通の人とはちよつと、デキが違うねん。記憶力では誰にも負けへん」

萌黄は恥ずかしげに照れたが、すぐに気を引き締める

と、

「つまり雛田さんは、『お前は』ではなく『真佐吉は』
という言い方をしたんです」

「同じことじゃないか」六道が口を尖らせて言う。

「内容としては同じです。でも直後に真佐吉がキレたこ
とを考えると、ここに秘密があると見るべきでしょう。
二人称で呼びかけても平気なのに、固有名詞では許せな
い。それは要するに、声の主は真佐吉ではないというこ
とではありませんか？」

「……………」

「さらに考えを推し進めると——悪口を言われて逆上す
るほどに、真佐吉さんを心酔している人間がこの世にい
るのでしょうか？ わたしは伊里江さん——弟の真佐夫
さんから、兄弟の逃亡時代にも、庇護ひごしてくれる人はい
なかったと聞いています。だいいち真佐吉さんはこの世
界をすべて破壊しようとして企んでいる極悪人。そんなマッ
ドサイエンティストに協力する人間がいるでしょうか」

「……………」

「それと、雛田さんの携帯」

「僕の携帯？」

「はい。さつき、PAIがフリーズしてるようなこと、
おっしゃってませんでしたっけ？」

「言った、言った」雛田はブンブンと首を振る。

「あれは、P A Iのメモリに強引にアクセスしたために起きた現象でしょう。真佐吉さんは、あの時、P A Iから雛田さんの個人情報盗み出したんです」

「そんな……チツクショー、やっぱり盗聴マニアじゃないか！」

「しかし」六道が鋭い目を向けた。「他人のP A Iの記憶を覗き込むなんて、技術的に難しいんだろ？ それに、得た知識をリアルタイムに使って、雛田さんと会話するなんて、人間業じゃないぞ」

「その通りです。だからわたしは『誰でもない』と表現したんです」

「誰……でも……ない……」

「二〇一四年のこの現代において、人がもつとも信頼している存在、信頼を共有し合っている存在、それは何だと思えます？」

ガクンと大きな音がした。全員が振り向いた先に、カプセルの縁に肘をついた清香がいた。まだ麻酔のせいで思うように動けないのだ。

「萌黄さん……それって、もしかして……P A I？」

12

カプセルが開いたとき青白かった清香の顔は、すでに

生気を取り戻していた。リアルパワーのなせる技だろう。萌黄はそう思った。すでに清香は忌まわしいカプセルを出て、雛田に支えられながら体力の回復を待っていた。萌黄は「真佐吉の正体はPAI？」という清香の言葉を受け、

「わたしはそう断定します。——歴史上、人類が初めて獲得できた完全無欠の〈親友〉、人間と揺るぎない信頼で結ばれた存在。それは、PAIを置いて他にないでしょう」

「よしてくれよ」PAI嫌いの雛田が吐き捨てた。「親友つつつても、PAIはペットの犬や猫のような生き物ですらない。ただのソフトウェアだ。それが人間様のご機嫌を取るよう、都合良くプログラミングされてるだけじゃないか。信頼もクソもない」

「待って」むんが言葉を挟んだ。「つまり、萌黄がさつき真佐吉に向かって悪態をついてみせたのは、その仮説を検証しようとしてのことなんやね？」

萌黄は、うんと頷き、

「真佐吉さんの名前を出して、テツテー的にこき下ろしてみた。ワザと子供みたいな言葉を使ってね」

「ワザとだったのか……」つぶやく萩矢。

「PAIは商品として市場に出回るにあたり、いくつかの基本設定が施（し）されました。そのひとつが『オーナーの

意見は全面肯定』です。PAIは決してオーナーには反論しません。冷静な他人が聞けば理不尽に思われる言葉でも、すべて受け入れてくれます。だからこそ爆発的なヒット商品となり得たことは、皆さんもよくご存知でしょう。……発売直後のこんなコピーを覚えてませんか？ 『PAIは常にあなたの味方です。あなたを慰め、励まし、時には一緒に怒ってくれます』」

「あっ」雛田が顎を突き出して叫んだ。「だから、へあの声〳は〵真佐吉〵の悪口に対して、過剰な反応を見せたのか！」

「おそらく。もちろんそれだけじゃ根拠が薄弱なことは否めません。そして、PAIのもうひとつの基本設定は、『画面登場時の姿形は変更できない』ですが——伊里江さん」

「……はい」

「お兄さんは、携帯電話を持ってた？」

「……ええ」

「PAIは？」

「……飼っていました」

「どんな？」

「……三本の首をもつ怪獣です。私は知らないのですが、マニアのあいだでは有名なキャラクタだそうです」

むんと清香が揃って、エーツと叫んだ。

「萌黄、まさか、真佐吉のP A Iって——」

「ズバリ、ギドラやね」

「でも、わたしらがコテージで初めてギドラを知ったとき、伊里江さんもいてたやん。伊里江さんもギドラを見てたはずやん。なんで——」むんがキツと伊里江を睨む。

「なんでその時に教えてくれへんかったん!？」

「……いえ」首を振る伊里江。「すみません。気づかなかったのです。あの時私は、すっかり体調を崩していたせいで視力も格段に落ちており、横になったソファからでは、何か動いてるな、くらいしか認識できませんでした。それに……言葉がまるで違いましたし」

「言葉……しゃべりかた？」

「……いいえ、兄のP A Iはいつも英語で話していました」

萌黄はポケットから携帯を取り出した。画面を開くと、モジだけが画面の中央で寂しげに座っていた。ギドラの姿はない。

六道が立ち上がった。その燃えるような目は天井を見据えている。

「オラオラッ、声だけのオッサンよお、答えろ！ お前は本当にP A Iなのか!？」

場内はしんとした。

人々は頭上に潜む、黒雲のように邪悪な意思に、背筋

をぞくりとさせずにはいられなかった。

——俺たちを脅した上で集め、無理矢理働くよう命じた相手がPAIだって？ そんなこと信じられねえ。

——〈声〉は次にどんな怒りの鉄槌を振るうだろうか。こんな地下深くにいるんだ。俺たちは袋のネズミだぞ。

——ずっと黙ってやがる。何を考えてるんだ？

（ここは魔王〈真佐吉〉の城、そして宴はクライマックス……）

萌黄の汗ばんだ指が、髪を梳き上げた。髪は滝の水を吸い込んだままで、べったりと頭に貼りついていた。

（仮説を支えるのは状況証拠ばかりだ。否定されればどうしようもない。果たして〈彼〉はどう出る？）

ダウン、ダウン。

突如、太鼓のような大音声が場内の空気を激しく震わせた。緊張で神経を張りつめていた人々は、大砲の音かと勘違いし、ある者は悲鳴を上げて人工芝の上に伏せ、ある者はあわてて正二十面体の下に潜り込んだ。

「言い過ぎたかな」

萌黄が首をすくめて音源を探ると、

「もう遅いって」

萌黄の両肩を、頬を引きつらせたむんがつかんだ。

ダウン。

音は観客席の後ろ、壁のどこかから聞こえてくる。音

の鳴る間隔は一定ではなく、まばらだ。

「あれも立体音響とやらかね？」

六道が訊ねたが、萌黄にも判らなかつた。判らなかつたが、なぜかとてもなく忌まわしい圧力を感じていた。とてつもなく。

〈あつはつはつはつは！〉

唐突に〈真佐吉〉の声が舞い戻ってきた。

「野郎！」

六道が持った銃を天井に向けたが、相手の姿はない。

〈萌黄さん。君はじつに面白い人だね。今日まで、とても楽しませてもらったよ〉

「！」

萌黄の全身が硬直した。むんが丸く見開いた目を彼女に向ける。

「この声——このしゃべりかたは——」

するとそれに答えるように、

〈ご指摘のとおりさ。ボクはギドラだよ。いつ気づかれるかと、ヒヤヒヤ、ワクワクの日々だったなあ〉

競技場の上空におぼろげな映像が現れた。半透明の立体映像は、萌黄が携帯の中で見たギドラに姿に間違いなかった。

（ああ、やっぱり……）

萌黄はふつと気が遠きかけた。正体を暴いた萌黄にし

てみれば、どこかに『真佐吉自身であつてほしい』気持ちがあつた。まさか自分と馴れ馴れしく会話を交わし、ずっとそばにいて、自分を観察していた相手だったとは。

「そやから……他人にはしゃべるなて言うたんやね？」

ギドラはクスクスと笑う仕草をして、

「へそだよ。だからコテージで皆さんに紹介された時は、最大のピンチだったのさ。伊里江真佐夫君がボクをまともに見たら、気づいたはずだからね」

「なんで、わたしの携帯に來たりしたん？」

「へハハハ、言つたじゃないか。君には非常に大きな興味を感じたからだよ。それだけ」

言うともた子供のような笑い声を上げ、巨大なギドラの映像は、三本の首を震わせながら、くるりと宙返りした。

「真佐吉さんは、どこにいてんのよ!？」

むんが吠えるように問うた。するとギドラの答えは、
「たつたひと言、」

「死んだよ」

13

「帰つたよ」「出かけたよ」とでも言うように、ギドラは軽い口調でそう言った。そのため、萌黄もむんも、そ

の意味を理解するまでに、しばしの時間を要した。

「……死・ん・だ……？」

伊里江は、目の下の隈も痛々しい顔でつぶやくと、身長三倍もある巨大な正二十面体に寄りかかりながら、幽霊のようにふらふらと立ち上がった。

「……あんなに元気だった兄さんが、どうして」

その小さな声を耳ざとく聞きつけたギドラは、首の一本をアリーナまで垂らしてくると、

〈君は博士の弟の真佐夫さんだね〉ギドラは真佐吉を博士と呼んだ。〈話は亡くなった博士から聞いているよ。たいそう苦労したんだってね〉

「……ウソだ！ これまでいくつもの修羅場をくぐり抜けてきた兄さんが、そう簡単に死んだりするものか！」

しかし、ギドラは申し訳程度に身体をすくめると、
〈ウソじゃないさ。それじゃ詳しく話してあげるよ。そうしろ博士が言い残したからね〉

ギドラは時間をさかのぼって、淡々と語り始めた。

真佐吉は弟を置いて、ひとり淡路島東岸沖の島を抜け出すと、単身、北海道のほぼ中央にある旭川へと向かった。

〈ボクと博士は、事前に誰にも悟られないよう、隠密裡に準備を進めたんだ。ふたりだけでね。弟を連れて行かなかったのは、博士の企てる復讐計画を彼が知れば、絶

対に反対するだろうからって」

その通りだった。事実、真佐夫は兄の計画を知ると、それを阻止するべく、後を追って島を出たのだ。

ギドラは続ける。

真佐吉はギドラに命じて、彼の手足となって働く人材の確保に奔走した。すなわち、人々の持つ携帯に侵入し、P A Iのメモリを読み取り、各々の弱みを握っては、ひとりひとりに極秘任務を与えた。ある者には「〇〇を所定の期日までにA社のB倉庫に搬入せよ」、ある者には「B倉庫にあるコンテナを、C地点まで誰にも知られずに運べ」という具合に。

へ人間は大事な秘密を、どうしてこうもP A Iに話したがるんだろうね。P A Iのメモリの中は、弱みの宝庫だらけだったよ。それを少しつくと、皆さんとてもきびきびと動いてくださる。一応、銀行の預金口座を操作して、幾ばくかの報酬は差し上げておいたけどね。誰も自分のやってることの意味を知らないし、何を組み立てているのか、何を移送しているのかも知らない。ある時には、帳簿の数字の変化に目を潰らせたり、セキュリティを突破するために、テレビカメラを故障させるなんていう指示も出したな」

「個人的な野望を達成するために、たくさんの人を脅しただけで手伝わせるなんて、前代未聞、空前絶後やわ」

萌黄が顔を歪めると、

〈人手不足だから、しょうがないよ〉

とギドラはにべもなく答えた。

旭川に送られた荷物は、やはり脅して駆り出された人々によつて所定の場所まで運ばれ、梱包を解き、組み立てられた。

へこうして、転送装置と小型ブラックホール生成装置は完成した。とはいえ、この時は北海道を吹き飛ばしただけだから装置も小さくて済み、楽だったよ。博士にとってはあくまでも次へのワンステップ、腕慣らしでしかなかったんだな〉

「腕慣らし!? ふざけんとつて! アンタらのせいで、うちの家族は——」

むんが噛みつくくと、

へアツそうか。あの時、君のご家族は北海道にいたんだったね。オツケー、ちよつと資料をさらってみるよ。どこかに映ってるかも〉

急にギドラの姿が消えた。そして再び現れた時、ギドラは胸に巨大スクリーンを抱いていた。もちろんこれも立体映像だ。

〈喜んで、むんさん。発見したよ〉

何を——?

訝いぶかしむむんや萌黄におかまいなく、スクリーンは奇妙

な映像を流し始めた。

スノーノイズ。テレビがまだアナログ放送だった時代、放送が終了した夜中によく見た画面。別名、砂嵐。

「違う！」

画面を大型旅客機が横切った。旅客機の翼はもぎとられていた。続いて、何台もの車、バス、トラックが途切れなくかすめていく。

へこれはね、ブラックホールが北海道を飲み込んだときの記録映像さ。ビデオカメラ搭載の無人ヘリコプターを何台も飛ばした成果だね

砂嵐は、ホンモノの砂嵐だったのだ。

また一台の車が通り過ぎた。ブルーのセダンだった。

画面が静止した。ナンバープレートが拡大される。

へこれは舞風親子が借りたレンタカーだよ。事務所のコンピュータの記録から見つけ出した

むんの身体に戦慄が走った。

へ残念だけど、中にいる人影が誰なのかは、ハッキリと判らないな。これが限界さ

セダンの中に、人間らしい影がふたつ。

「ま、待ちいよ。なんでこんな映像が残ってるんよ」萌黄はギドラを睨んだ。「ここに映ってるのは、今わたしがいてるこの世界とは全く別の、前に作られた鏡像宇宙でしょ？　そこからどうやって記録データを持ってきて

たん？ 装置が転送できるのは、人体だけやったはず」
へウン、いいところに気づいたね。なあに、簡単なことだよ。へりの撮影映像を受信したコンピュータから、直接、電波でリアル世界に送ったんだ。互いの世界を結ぶ道が開いていけば、それは可能だからね」

「電送なら可能……」

萌黄は開けた口を閉じるのも忘れて、スクリーンを見つめていた。そんなことができるのか――。

画面は岩場を映している。

〈以上さ。それじゃ切るね〉

「待つて！」

むんが手を挙げた。その指先がスクリーンの隅を指している。

巨大な岩影に、ひとりの男性がたたずんでいた。血に濡れた顔をこちらに向けている。

「――お父さ――」

むんは膝から骨組みの上に崩れ落ちた。

へえっ？ これがそうだったの？ いや気づかなかつたなあ、ボクとすることが。失敬失敬」

ギドゥは屈託なく笑う。

むんの父、舞風太一は口を動かしていたが、砂嵐のせいで何も伝わってこない。やがて巨大な岩はゆっくりと地面を離れ、太一ともども、空中高く舞い上がった。

映像はそこで終わった。

むんは顔を両手で包んで泣いていた。

萌黄にはかける言葉も思いつかなかった。

「いずれこの世界も、ああなるのか」

六道が独り言のように言うと、

へそう。でもリアルのが数が違うから、もっと派手になることは保証するよ

ギドゥは話を再開した。

北海道の消滅を見届けた真佐吉は、広大な大地を飲み込むブラックホールの力を借りて、自らをもとのリアル世界に転送した。実験の成功に気を良くした真佐吉は、一路、WIBAに向かつて列島を南下した。

WIBAを終焉しゆうえんの地とすることは、当初から決めていた。すでに準備は北海道と平行して行われていて、後はリアルを集めるだけだった。

そして、政府に対して最後通牒が突きつけられた。しかし政府はこれをつっぱねたため、WIBAにおいて、最大にして最後のブラックホールが生成され、この鏡像世界が生まれたのだった。

「真佐吉さんが亡くなったのはいつ？」

萌黄もいつしか感情がそげ落ち、朦朧とした頭で訊ねていた。

へ北海道が消失し、鏡像世界から帰還した直後、博士は

突然倒れた。博士は誰にも言わなかったけど、末期がんだったんだ」

「ザザとノイズが走り、録音らしい音声の流れ出した。『——私の心臓には負担が大きかったようだ。……ギドラよ、人生を賭けた勝負は、どうやら私の負けだ。私は科学の神にも見捨てられてしまった。もう少しだったのにな。……それでも、政府は私の要求を受け入れるだろう。あの北海道の有様を見て、さすがにこれ以上拒否するまい。拒否されれば、それこそ私の完全敗北だがね。……WIBAに作った転送装置は、我が人生の記録として、弟の真佐夫の手に委ねる。WIBAは真佐夫の〈終つひの住すま処〉となるよう、手配してくれ——』」

真佐吉の生録音だ。

「これは、倒れてすぐ、ボクに語りかけた言葉だよ。だから、政府の返答が来る前だね。博士はそれから三日後に亡くなった。そしてボクは博士の遺志を引き継いだ。そういうわけさ」

萌黄は頭を横にブルブルと振った。

「アンタ、真佐吉さんが亡くなってから、ずーっと博士のフリをしてたん？」

「へへへ。そうなんだ。だって遺言だもん」

「真佐吉さんは、なんて言いはったんよ？」

また再生が始まった。激しい嘔吐する声やし、

『——チクショー、なぜ私ほどの天才が、こんな運命に見舞われねばならん。この世界はどこか狂っているのだ。ならば、やはり消すしかあるまい。それこそが私に与えられた使命だったのだ。……いいか、ギドラよ。私が死んだら私になり代わって、世界を破滅させる。もはや政府の返答などどうでもよい。この世界は私もろとも地獄に堕ちるのだ。アッハッハッハ。……ナニ？ 影武者であることがバレたらどうするか？ それぐらい自分で判断しろ。貴様は私がN A S Aから引き抜いた、世界一優秀なP A Iではないか！ アッハハハハハ。私はあの世で待っているぞ！』

音声は最後に高笑いが続いて終わった。

〈この後、博士は事切れたんだよ〉

「ちよ、ちよ、ちよつと！」

〈萌黄さん、そんなにあわてると装置から落ちるよ〉

「アンタ、今のが本当に遺言？」

〈そうさ〉

「そうさやあらへんよ。真佐吉さんが正常な判断のできる状態やないことぐらい、聞いてて判るやろ？」

〈それはボクの知ったことじゃない。ボクはただ遺言を実行するだけさ〉

萌黄やむん、雛田、清香、六道、シュウ、そしてその他の人々も含めて全員が、互いに顔を見合わせた。真佐

吉の最期の言葉は、いかにも末期がんが脳に転移したことをにおわせていた。だがギドラは——真佐吉の忠実なるしもべは——勝手に暴走し、世界を破滅に導いたのだ。ギドラは萌黄たちリアルを、決してここから逃がすまい。閉じ込めたまま、機が熟す——いや、リアルのエネルギーが臨界に達するのを待つつもりだろう。

ドウウン。

またあの音が鳴った。先ほどよりも大きい。

へうるさいなあ

ギドラはスクリーンを切り換えた。するとそこに、全く得体の知れない生き物が映った。

14

パン焼き器に放り込まれた、焼き上がる前のパン生地——萌黄はそんなものを連想した。

しかし、このパン生地は生きていた。

焦点距離の短い広角レンズが捉える中、白い物体はブヨブヨとうねるように動いていた。が突然、生地的一片が跳ねるようにレンズに急接近したかと思うと、映像はそこでぶつりと途絶えてしまった。

と同時に、あのドウウンと壁の鳴る音が響いてきた。忌まわしい音の正体は、あのパン生地だったのだ。

「何やったん、今のは……。気色悪う」

萌黄は手で、鳥肌の立った二の腕をさすった。

「あれは」むんは警戒するように壁を睨みながら、萌黄に顔を寄せてささやいた。「信じられへんやるけど——真崎よ。真崎はリアルやってん」

萌黄は二重の意味で驚いた。

「ウソ……信じられへん」

「でも事実よ。わたしはこの目で、真崎が人間の姿から怪獣に変身するのを見たんやもん」

「……………」

「真崎はね。リアルパワーを、身体を変えるのに使うことができたらしいわ」

ギドラの声が割って入った。

へなるほどねえ。リアルが操れるのは空気やガスばかりじゃなかったんだね。ギドラは、納得したと言わんばかりに頷いている。へそうになると、彼にも協力してもらわなければならないな。でもあの図体じゃ、カプセルには入らないかあ。>

まだやるつもりなのか？

「もうあきらめるんやね」萌黄は高飛車に言った。「アインタの務めは、真佐吉さんが亡くなった時点で終わってるんよ。おとなしくNASAに帰りなさい」

ギドラは答えず、改めてスクリーンに別の映像を映し

出した。

緊張感が高まった。

(今度はどんな生き物が出てくる?)

だが意外なことに、現れたのは普通の人間たちだった。年輩の女性と三人の女の子。彼女らは一様におびえた表情を浮かべていた。背景には殺風景な白い壁。どこかのせまい一室に押し込められているようだ。

「貴様！」声を荒げたのは六道だった。「俺の妻や子供まで、人質に捕まえてやがったのか！」

なんと、彼女らは六道の家族だったのだ。

へそりやそうだよ。万全を期すためにね。さあ、リアルたちを計画どおり、カプセルに導いておくれよ

真佐吉の傲岸な口調は影を潜めたが、言ってることは前と同じである。

「しつこいぞ！俺はもうお前の命令など——」

三人の中で一番小さな女の子がキャツと悲鳴を上げた。彼女らの足許をひたひたと水が打っており、水位は見ているうちにどんどん上昇していく。

へさあさあ、六道さん。急がないと取り返しのつかないことになっちゃいますよ

ギドラは、真佐吉になりすますことから解放されたせいか、冷酷なセリフを口にするのも、まるで雑談でもしているかのような軽やかさだ。

“PAIが従うのは、オーナーの命令だけ”

人類の永遠の友と謳われた犬から、キング・オブ・ペットの地位を奪取したPAI。

ユーザが圧倒的に支持したそのPAI原則が、知能の高いギドラにおいても、揺るぎない根幹をなしているなら、ギドラを説得して真佐吉の遺言に背かせることなど絶対に不可能だ。

水は、末娘を抱えた母親の膝に達してなお、上昇をゆるめない。

「六道さん……」

萌黄が声をかけると、

「何も言うな！ どうせアイツの言うとおりにすれば、リアル爆発の相乗効果で、この世界は消えてなくなるんだろうが！ どっちみち俺たちに助かる道はない。それに」六道は涙に濡れた顔を上げ、「俺たちはホンモノじゃないんだろ？ リアルの——ホンモノの俺や俺の家族は、向こうの世界でちゃんと生きてるんだろ？ それならヴァーチャルの俺たちが死のうがくたばろうが、大騒ぎするようなこっちゃないんだ。ハハハハハハ」

妻が六道の名を口にした。彼は両手で耳を塞いだ。

アレレ、とギドラが茶化すように言った。

へ六道さん、家族を見捨てるのかい？ それはひどいな、人間のすることじゃないよ」

萌黄の怒りは沸点に達したが、どうすることもできない。
い。

「君が動かなくても、次は別の家族が犠牲になるだけさ。時間の無駄というものだよ」

アリーナの男たちに戦慄が走った。次は誰の家族だ？ いたたまれず、萌黄は顔を背けた。その目がアリーナの隅でかがみ込んでいる迷彩服たちを捉えた。

萌黄は正二十面体を蹴った。ひと飛びで十数メートルを滑空すると、彼らのそばにひらりと着地した。

「何してるの？」

「やっとコネクタを見つけた」シュウは手を止めずに答えた。「俺たちは地上から1フロアずつ、地道にセキユリテイを解除してきた。ここでもそれができれば、ヤツの企みを阻止できるかも知れない」

シュウは壁のコネクタとケーブルで接続した小型コンピュータのキーを、狂ったような速度で叩いている。

画面に『ファイルをアップロード中』のメッセージと、経過を示すインジケータが表示された。

百パーセント。アップロードは終了した。

「……………」

神経を研ぎ澄まして、場内の様子を観察するシュウ。しかし何の変化も訪れない。

「——ぷっ、アハハハハハ」

ギドゥは、我慢できなくなつたというような笑い声を上げた。

「ボクを見くびらないでほしいな、リアルキラーズの皆さん。そんなレベルの低いプログラムじゃ、この最下層エリアのコントロールをボクから取り上げるのは無理だよ」

それを聞いた萌黄は、素早く背中のリュックを下ろした。中を開け、ノートパソコンを取り出す。ディスプレイを立てて起動ボタンを押すと、画面が明るくなるのを待たずに、シュウのマシンに手を伸ばし、コネクタを根元から抜き取った。

アツと叫んだシュウを無視し、外したコネクタを自分のマシンに接続する。立ち上がった画面を見ながら、目にも止まらぬ速さでデスクトップに置かれた真っ赤なアイコンをダブルクリックした。

たちまちアップロード開始のメッセージが現れたが、ハードディスクのアクセスランプが灯ったが、わずか一秒で消えた。

「これはわたしお手製のウイルスソフトです。伊里江さんのサイト“アルカトラス”を破る時に開発したのを、京都市大で改良したモンで——効いてくれたらええんやけど」

聞かされても、シュウは険しい目を白黒させるばかり

で理解が追いつかない。

ピツ。

ディスプレイ中央に新たなウィンドウが開いた。

ウィンドウは黒一色に塗り潰されていたが、その中をグレーの直線が植物のように枝を伸ばしつつあった。枝はある場所ではふたつ三つと枝分かれし、ある場所では円を描いて停止した。

伸びた線はまるで血管に血が通うように、根元から少しずつ枝の色をレッドへと変化させ、さらに後を追うようにブルーへと変化させていく。

へあ……かゆい。なんだか身体がかゆいぞ

萌黄はチラツとギドラに視線を送り、すぐにディスプレイに戻す。

「どうやら効いてるようです」

「あのP A Iに対してだな？」

「そう。このグレーの線は、認識できたシステムを表しています。レッドがウイルスの達した箇所。ブルーは」

「コントロールを奪い取った部分？」

「はい」

ふたりは同時に背後を振り返った。

宙に浮かぶギドラの身体から、全身を覆う黄金のウロコが次々とはがれ落ちていた。そしてあらわになった皮膚にはヒビが走り始めた。

へうわーっ、かゆくてたまらないっ

ギドラは身をねじるようにして、身体を掻きむしった。元々腕がないので、代わりに頭のツノをガリガリと身体にこすりつけている。

ツノのあいだからこぼれおちたウロコや皮膚が、砂と化して消えていく。もちろんすべてが立体映像である。実際にはアリーナには何も落ちてはこない。あくまでも「象徴的な意味」で今、ギドラはその巨大な力を奪われようとしていた。萌黄が開発したウイルスソフトによって――。

「すごいんだな、君は」

シュウは隣りにいる、見た目は普通の小柄な女性に対して、初めて敬意のこもった視線を投げかけた。

「ラッキーなだけです。それより」

背後からの、懇願とも哀願ともとれる悲鳴が彼女を急き立てていた。六道の妻子の命は風前の灯だった。

萌黄は自分のノートパソコン——京都工大でもらった、リアル用に左右逆に作られた特注Mac——マッキントッシュの画面をあわただしく指さした。

「教えてください。ここからはよく判りません」

シュウはディスプレイを覗き込んだ。画面いっぱいに広がったウィンドウには、縦横に無数の線が走っている。「この回路図のようなものは、あの怪物が支配しているWIBAの制御系統を表しているんだな」

線の終端や線同士の交点に、MOVE、ROTATE、CONNECTなどの文字が並んでいる。

「そうです。それでOPENは、そこに閉じた状態の扉があることを示しています」

悲鳴がひときわ大きくなった。六道の妻子を浸す水は、すでに彼女らの肩にまで達している。

「シュウさん、教えて！ どの扉をOPENにしたらええの!？」

「うっ——」

そう問われても、初めて見る凶面にシュウは返答のしようがない。彼にとってもWIBAの地下は未知の領域なのだ。

絹を引き裂くような断末魔が耳朶を打ち、それが業を煮やした萌黄の背中を押した。

「全部、開いたらええんや！」

萌黄は指を動かした。OPENの表示をまとめて選択すると、ENTERキーに人差し指を叩きつけた。

間に合うのか？

逸る気持ちで振り向こうとした時、すぐそばでゴウン

と大きな音が鳴った。萌黄は心臓が破裂するかと思うほど驚いた。

だが驚くのは早かった。パソコンと接続したコネクタに隣接する壁が、手前に向かってせり出してきたのだ。

壁はゆつくりと芝の上に倒れ、その陰から現れたのは、清香らを閉じ込めていたのと全く同じ、楕円体のカプセルだった。しかも中には人が横たわっていた。

長髪の下の青白い顔は「弟」によく似ていた。写真で見ただけに着用していたジージャンの胸元で組まれた指は、トレードマークのサングラスを握っていた。

伊里江真佐吉。

リアルであるその身体からは、何の波動も伝わってこない。彼はやはりこの世の人ではなかったのだ。ギドラが言ったのは事実だった。

ザザーツと水流の音が、萌黄を現実に戻した。

六道の妻子を閉じ込めていた部屋の扉は無事に開いたらしい。水流が見る見るうちに下がっていく。「逃げるのよ！」と母親の声も聞こえた。

(よかった)

萌黄はホッと胸を撫で下ろすと、おもむろに真佐吉のカプセルへと近づいた。

志こころを半ばにして倒れた非業の科学者。人工的にブラックホールを作り出すという歴史的偉業は、悲しくも、

彼自身の人生までをも飲み込んでしまったのだ。

「全ゲート・オープン」の命令によって、真佐吉の遺体ともご対面できたわけか」

シュウがつぶやいた。

弟の真佐夫にも知らせてやろうと萌黄が顔を上げた時、すぐそばにギドラの首が垂れ下がっているのに気づいた。すでにギドラの大きさは半分ほどに縮まっており、背中の翼は折れ、あれほどの輝きを放っていた身体はひからびたようにくすんでいた。

「萌黄さん、君は大変なバカだよ」

「……………」

「へきつと後悔するよ。——まあいいや。ボクはもうおしまいだしね。最後まで君に付き合っただけで遊んでいたけど、これでお別れだ。あの世で会おう」

そう言うと、ギドラの全身は蜃気楼のように揺らめき、またたく間に砂の塊となって崩れ落ちた。もちろん映像であるからアリーナには砂粒ひとつ落ちてはこなかった。

「PAIに天国はないよ」

萌黄はぼつりと言った。

しかし感慨に浸っていられたのも、そこまでだった。

壁に続いて、今度は床が動き始めたからだ。

「あつ」「うわっ」

萌黄はバランスを崩して転倒した。それほど床の動く

速度は速かったのだ。

男たちがワツとどよめいた。我先にとアリーナを囲む壁に向かって駆け出した。

萌黄はようやく事の重大性に思いが至った。なぜ気づかなかったのか。全ての扉をOPENにするということ
は――。

「アリーナの床が開いていくぞ！」

シユウが驚くのも無理はない。彼はさきほど開いていた時にはいなかったのだ。

正十二角形のアリーナ。今またそれが十二個に分かれ、周囲の壁の下に引き込まれようとしている。

何人かが足を滑らせて、奈落の底へと落ちていった。それがまた男たちをあわてさせ、押し合いへし合いとなり、彼らの逃げ足を鈍らせた。

「萌黄さん、君も客席に登れ」

シユウは萌黄の腕をつかんだ。ふたりがいたのは壁際だ。気をつけないと、自分たちまで床とともに収納されてしまいかねない。

「む、むんが」

例の正二十面体の骨組みの上、むんは雛田や清香、齋藤、炎少年らとともに取り残されていた。力の出ない伊里江も、必死の形相で骨組みの横っ腹に張りついている。「助けにいく！」

そう言つてジャンプしようとして腰を屈めた途端、つんと水の臭いが鼻をかすめた。萌黄は頭上を振り仰いだ。すると天井に円周状に開かれたスリットから、再び多量の水が噴き出したではないか。

(外との隔壁まで開いてしもた——)

一度はギドラによつて電力供給のために開かれたエンジェルフォール。不用意にも、その元栓を再び開いてしまったのだ。

「バカっ、死ぬつもりか！」

シユウは萌黄の胴に手を回して、客席へと手荒に放り投げた。続いてシユウも壁を乗り越えた時、滝の先端がアリーナに達した。

湖水はまだ仕舞い切つていなかった床を叩き、男たちの半数を穴の底へと払い落とした。その中には萩矢もいた。

「ああ！——どないしよう」

「どうしようもない」

すでに萌黄の前は、エンジェルフォールで仕切られていた。跳ね上がる水滴が彼女の全身をずぶ濡れにする。

水のカーテンの遙か先に、天井から吊り下がった正二十面体が透かして見える。取り残されたむんたちは、逃げ場を失い、ひたすら骨組みにしがみついている。何とかしなければ。

「やっぱりわたし、行きます！」

萌黄はシュウの腕を振り切って、客席のあいだを右へと駆け出した。

滝には放水口のスリット間の隙間に合わせて、四方向に切れ目がある。萌黄はそこから突入しようというのだ。

「待っててや、むん」

切れ目の正面に立った萌黄は、躊躇せずに壁を越え、空中に身を躍らせた。

天井からたった一本のワイヤーで吊り下げられた黒い正二十面体は、まるで振り子のように円を描いて揺れている。乗っている人々はたまったものではない。萌黄は空中を泳ぎながら考えた。彼らをどうやって救い出そう。(あの立体こそが転送装置やと、ギドラは言うてた。重たそうやけど、エアクッションで立体ごと助けられたら……)

その時、骨組みの上に伏せていた雛田が、何ごとか叫びながら、萌黄の斜め後方を指さした。

肩越しに後ろを見た萌黄は、エンジェルフォールの向こうに白くうごめくものを認め、愕然とした。

あのパン生地が——元は、真崎だった怪物が、観客席の後ろに開いた四角い扉から這い出してきたではないか。シュウたち、数人の迷彩服は、それぞれ銃やマシンガンで応戦しているが、怪物には傷ひとつ付けられない。

怪物は、そのうごめく巨体から一枚の布切れを落とし、朧黄はそれに見覚えがあった。最後に会った時、柎が着用していたTシャツだ。すると彼はこの怪物に食われてしまったのか。

怪物は狭い扉をぐり抜けると、シユウたちには目もくれず、客席の上をごろごろと転がりながら、まっしぐらに滝へと近づいた。そしてカタツムリのごとく伸ばした二本のツノを滝の中にくぐらせ、によるよるとアンテナのように動かした。

(わたしたちを探してる?)

ツノはすぐに引っ込んだ。と、間を置かず怪物は身体を細長く伸ばすと、水しぶきを上げて、滝の中に突っ込んできた。その先端はまるでドリルのように回転していた。朧黄に向かって一直線に迫ってくる。

「わっ」

そのカミソリ状に平べったく変形した怪物に対して、朧黄は空中で宙返りすると、間一髪で接触を逃れた。

しかし怪物の身体は、勢いがついたまま止まらず、骨組みの上にあった、むんに向かって直進した。

朧黄は身体を回転させながら、その光景を見た。

むんの首が怪物によって深々と切り裂かれるところを。